

『先史学・考古学論究』V（甲元眞之先生退任記念）抜刷
龍田考古会（熊本大学文学部考古学研究室内）
2010年2月20日発行

九州出土の玦状耳飾に関する基礎的検討

下村 智

九州出土の玦状耳飾に関する基礎的検討

下村 智

はじめに

1. 九州地方における研究抄史

2. 玦状耳飾の形態分類

3. 各県出土の玦状耳飾

4. 基礎的検討

おわりに

論文要旨

玦状耳飾とは、耳介に穴をあけ垂下装着する耳飾の一種である。九州地方では1920年、熊本県の轟貝塚で長谷部言人の調査により、2点の白色大理石製玦状耳飾が発見されたのを嚆矢とする。以来、資料が蓄積され、09年時点で90遺跡111点以上の類例を数えるまでになった。本論では、これらの資料をもとに基礎的な検討を行うものである。

まず、これらの資料を形態分類するとA類からG類まで7類に類別することができる。列島内から出土するほとんどの形態が存在していることがわかる。玦状耳飾を出土する遺跡は各県に分布しており、特に九州西半部に多く、島嶼部や沿岸部が目立つ。野首遺跡で6点、轟貝塚で4点、荘貝塚で6点の複数出土が見られる。

近年、アカホヤ火山灰の下位で出土する事例が増えてきている。それらは円環形や金環形を呈し、初源期のタイプとすることができる。共伴する土器は轟A式土器である。アカホヤ火山灰上位では、轟B式土器に伴い扁平円形化し盛行する。やがて縦に長い楕円形や横に広い楕円形へと変化する。石材は主に淡緑色の軟玉質や白色大理石が用いられている。前期の中葉から後葉にかけては長脚形や三角形、石庖丁形に変容し、石材は主に滑石や蛇紋岩を用いる。そして、前期の終わりから中期の初めにかけては減少し終焉を迎える。

したがって、九州の玦状耳飾は貝殻条痕を地文に持つ轟式土器文化で盛行する耳飾と考えてよさそうである。その起源、系譜についてはさらに検討が必要であるが、中国東北部から伝わったものが日本海側で一旦定着し、その流れが九州にも及んだものであろう。

キーワード：玦状耳飾、九州、白色大理石（結晶質石灰岩）、軟玉、荘貝塚

連絡先：〒874-8501 大分県別府市北石垣82 別府大学

はじめに

2005年九州縄文研究会によって、九州の縄文時代に関する装身具のすべてについて、画期的な集成作業が図られた。各県の担当者が総力をあげて行ったもので、基本的な資料として高く評価されるものである。今回取り扱う珧状耳飾もその中に含まれ、64遺跡78点が取りあげられている。

近年、わが国における珧状耳飾の始源に関する研究が活発になり、ロシア極東地域、中国東北部地域、中国江南地域出土の珧状耳飾および関連の玉類との系統関係が検討されている。その中で、大陸に最も近い九州地方の出土状況がネックになっていた。九州地方では、列島内で出土するすべての形態の珧状耳飾が出土しており、類例も増加している。しかし、これまで全体を通しての検討はなされてこなかった。

そこで、本論では最も古い形態のものから終焉を迎える新しい形態のものまで含めて、現段階で知りうる資料をもとに基礎的な検討を試みたいと思っている。

1. 九州地方における研究抄史

珧状耳飾とは、耳介に穴をあけ垂下装着する耳飾の一種である。九州地方で珧状耳飾が最初に発見されたのは、1920（大正9）年7月のことであった。当時東北帝国大学の長谷部言人は、古人骨蒐集のため熊本県轟貝塚の一部を発掘し、人骨約20体と共に白色大理石製の珧状耳飾2点を発掘したのである（濱田他1920）。その後、この轟貝塚出土の珧状耳飾は、わが国最初の集成研究である梅原末治の『鳥取縣下に於ける有史以前の遺跡』（梅原1922）に取り上げられ、さらにそれを受けて、基礎的研究を行った樋口清之の『珧状耳飾考』（樋口1933）にも再録され、九州地方でも珧状耳飾の存在が広く一般に知られるようになった。

それ以後、戦前戦後を通じて珧状耳飾の類例は徐々に増加していったが、特に1970年代以降は発掘調査の増加と共に発見例が急増した。中でも、鹿児島県下の発見増が著しく、上焼田遺跡の報告（出口・池畑1977）から珧状耳飾の地名表を掲げ始めた。西之園遺跡の報告（池畑・長野1978）では出土地名表に加え、他4遺跡出土の珧状耳飾について写真を掲載し、主要な珧状耳飾について集成を行った。さらに、県下で最多数の珧状耳飾を出土した荘貝塚の報告（池水・長野他1979）では、これまでの総まとめとして県下の珧状耳飾地名表を掲載するにいった。このように九州地方では、1970年代まではいわば資料蓄積の時代ということができよう。その中で、注目する研究がある。前川威洋は縄文後期の装身具に関する総合的な研究（前川1969）を行い、九州の珧状耳飾7遺跡9点を一覧表に掲載し、縄文前期に所属する年代観を示した。

資料の増加と共に、1980年代に入ると珧状耳飾に関する本格的な研究が始まった。筆者は当

時集成した29遺跡40点以上の玦状耳飾をもとに、計4点出土している轟貝塚の玦状耳飾について検討(下村1980)を行った。そのうち3点は円形の古いタイプで、いずれも石材は白色大理石であることを示した。さらに他遺跡の伴出土器をふまえて、轟式土器の成立と玦状耳飾の出現には密接な関係があると考えた。また、九州地方での分布や石材、用途などから中国の玦との関係を想定した。翌年、さらに10点ほど類例を追加し、肥後考古学会例会で集成検討した内容を発表(下村1982)した。ほぼ同じころ上田耕は、鹿児島県を中心に九州出土の17遺跡28点の玦状耳飾を対象に編年、起源、形態、素材、使用方法等の検討(上田1981)を行い、轟B式土器に伴うとした。起源については、一応国内で自生したものが東から九州に伝わったと考えた。この時点で最も多角的に検討された論考となっている。また、島津義昭は『日本歴史地図』に玦状耳飾の出土遺跡を29遺跡紹介(島津1983)している。80年代後半には、わが国における玦状耳飾について、その習俗の系譜と出自を大陸江南地方に求め、台湾を経て南海ルートで伝来したとする説(鈴木1987)も出された。

1990年代に入ると、示唆に富む論考が発表された。水ノ江和同は韓半島や大陸に近い九州地方の玦状耳飾のあり方をまとめる目的で、32遺跡36点の玦状耳飾を取り上げ、早期、前期、後・晩期の類例について検討(水ノ江1992)を加えた。それによると、「九州では早期から晩期初頭まで玦状耳飾が断続的に存在する。前期以降は共伴している土器がいずれも西日本一帯での交流が問題となる土器かもしれないが、瀬戸内地域の土器そのものであり、在地性の強い九州の土器には伴わないのが現状である。したがって、九州の玦状耳飾は九州以外の地域との交流を示す遺物の一つであると考えられよう。」と結論づけた。そして、本格的に盛行するのは轟B式土器の前期初頭以降と考えられている。90年代までは九州地方の玦状耳飾は轟B式土器に伴うとされるのがほぼ共通の認識(新東1993・上田1994・上田・桑畑1997・上田1998)であった。

ところが、2000年代に入り宮崎県永迫第2遺跡の調査(廣田2003)でアカホヤ火山灰下位から玦状耳飾が出土し、その始源が問題となった。調査を担当した廣田晶子は、近年アカホヤ火山灰下位から出土する玦状耳飾をもとに類型化を行い、断面が厚いものをⅠ類、断面が薄いものをⅡ類とした。さらに、Ⅱ類を切目が短いⅡa類と切目が長いⅡb類に細分し、Ⅰ→Ⅱa→Ⅱb類という変遷がたどれることを指摘した。Ⅱb類はアカホヤ火山灰下位にもあるし、上位にも存在することから、北陸地方や大陸の中国東北・江南地域の玦状耳飾と形態・時期的に異なる様相をみせるとした。しかし、下位に類型化された上野原例などは形態的に新しいものであり、これについてはすでに新東晃一が指摘(新東2006)しているところである。なお、同様の内容は敬和学園大学で行われた研究会でも発表(上田・廣田2004)された。

2005年2月、沖縄県立埋蔵文化財センターで第15回九州縄文研究会沖縄大会が開催された。テーマは「九州の縄文時代装身具」であった。これまで報告された「装身具」の情報を網羅・把握するため、九州各県の担当者が総力をあげて作成された資料集(九州縄文研究会2005)は、

まさに基本資料として高く評価されるものである。この中には、これまで報告されているものを中心に64遺跡78点の玦状耳飾が収録されている。

最近、新東晃一は九州域でのアカホヤ火山灰下位から出土する玦状耳飾の形態を整理し、始源期の検討（新東2006）を行った。アカホヤ火山灰下位からの出土が確認される4点を中心にⅠ類とし、アカホヤ火山灰上位から出土するものをⅡ類とした。さらに、Ⅰ類は断面が厚いⅠa類、断面が薄いⅠb類と細分した。その後、藤田富士夫の論文（藤田2003）を受けて再度整理・検討（新東2008）を行った。その中で、新たに環状玦を古式に位置づけ、アカホヤ火山灰下位のものをⅠ型玦状耳飾（環状玦）とⅡ型玦状耳飾とされ、Ⅱ型玦状耳飾はⅡ類：金環型玦状耳飾に類別された。アカホヤ火山灰上位のものはⅢ類となり、それぞれ旧稿（新東2006）のⅠ類がⅡ類に、Ⅱ類がⅢ類に再編された。そして、Ⅰ型玦状耳飾を始源期に位置づけ、Ⅱ型玦状耳飾を初源期の形態として明確化された。「九州の始源期の玦状耳飾は、早期の後半の中頃（アカホヤ火山灰降灰前）に北部九州を経て、強いて述べれば西海岸沿いに南部九州へも伝播した」と考えられている。アカホヤ火山灰下位からの発見で、九州地方の玦状耳飾は新たな研究段階を迎えたことになる。なお、2008の新東論文には、九州出土の玦状耳飾75遺跡89点の出土一覧が示されており最も充実したものになっている。

九州地方では、アカホヤ火山灰下位からの出土で、玦状耳飾は早期まで遡ることが明白になった。しかし、系譜、形態変化と編年、共伴土器との関係、材質等々、まだまだ解決しなければならない問題も多い。それらを解決するためには、良好な出土状態の資料が必要であることは論を待たないが、そう簡単にはいかない。そこで、限界はあるものの既出の資料をできるかぎり収集し、検討を図っていきたいと考えている。以下、現段階で集めた資料をもとに検討を進めたい。

2. 玦状耳飾の形態分類

まず、各県出土の玦状耳飾を見ていく前に、九州出土の玦状耳飾について形態分類を試みたい。すでに、戦前樋口清之によって玦状耳飾の各部名称や形式図（樋口1933）が示され、現在でも各種論文に引用されているが、九州出土の玦状耳飾には多くの形態が存在し、それに該当しないものがあるので、ここで改めて形態分類を行う。なお、各部名称は樋口にしたがう。

図1に示したのが形態分類図である。まず、大分類としてA～G、中分類としてⅠ～Ⅲ、小分類としてa～cとするが、ここでは資料数の関係から中分類までに留めておきたい。

A類は、環体の幅よりも中央孔が大きいものである。AⅠ類は大型、AⅡ類は通有の大きさで、円環形を呈している（円環形）。AⅡ類は、切目の長さが短くなるものが多い。AⅢ類はいわゆる指貫形を呈するものである（指貫形）。

B類は、円形で中央孔の径と環体の幅が同じか小さくなるものである。BⅠ類は断面に厚み

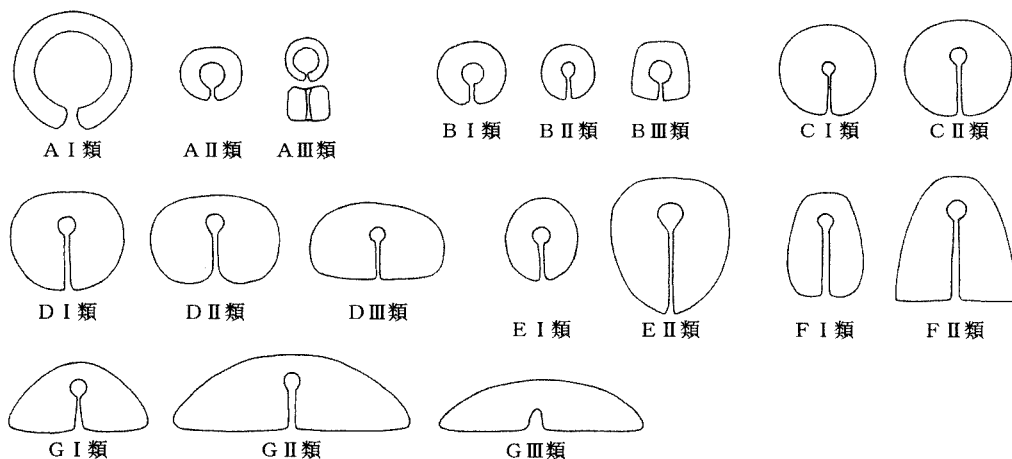


図1 九州出土の玦状耳飾形態分類図

を持つもので、切目の長さが短くなる例が多い。B II類は中央孔がさらに小さくなりやや扁平化する。ともに（金環形）としておきたい。B III類は別に分類したほうがよかったのかも知れないが、中央孔が中心にあり、作りがB II類とよく類似しているのと、とりあえず、ここではB類に含めておきたい。方形を呈し類例は少ない（方形）。

C類は、円形を呈する扁平化した一群（扁平円形）で、最も出土例が多いものである。中央孔がほぼ真ん中に位置するものをC I類、中央孔が上辺に片寄るものをC II類とする。C類以降はすべて扁平化し、中央孔が上辺に片寄る。

D類は、横に広がる楕円形（横楕円形）で、楕円化の小さなものをD I類、横に広がり大きな楕円形をD II類、さらに楕円化が進み下辺が直線的になるものをD III類とする。

E類は、縦に長い楕円形（縦楕円形）で、楕円化の小さなものをE I類、縦長の楕円化が進み長脚状になるものをE II類とする。

F類は、細身で縦に長い形態をとり、脚部が発達したもの（長脚形）である。下端部にやや丸味を持つものをF I類、脚端部が直線的になるものをF II類とする。

G類は、三角形や石庖丁形を呈する横長一群である。G I類は別に分類したほうがよかったのかも知れないが、下辺が直線化している一群なのでG類に含めた。いわゆる（三角形）と呼ばれるものである。G II類は中央孔と切目が明確に認められるものであり、G III類は中央孔が退化し、切目だけが残るものである。ともに、いわゆる（石庖丁形）と呼ばれるものであり、かなり変容した形態を呈する。

3. 各県出土の玦状耳飾

それでは、各県ごとに出土した玦状耳飾について概観していきたい。2009年段階で90遺跡

111点以上の出土を確認している。玦状耳飾の詳しい説明は各報告や論文等にゆずるが、筆者が実見・実測したものについては私見に基づいて少し説明を加えたい。

(1) 福岡県

福岡県からは15遺跡17点が出土している。A類以外はすべてあるがF類が目立つ。図2-1・2は沖ノ島出土で、1は社務所前遺跡(鏡山他1958)、2は4号洞穴遺跡(岡崎・小田他1971・岡崎1979)からそれぞれ出土している。1はFⅡ類に属し、長さ6.3cmで粘板岩製の端正な作りである。2も粘板岩質で一部しか残っていないがF類に属するものであろう。両遺跡とも縄文前期の土器が主体を占めるが、瀬戸内系の中期の土器も出土している。図2-3は門田遺跡出土(木下1978)のもので、FⅠ類に属し、長さは7.2cmで両面に粗い研磨痕が残る。全体的に灰緑色を呈し、石材は軟玉質か質のよい滑石であろう。図2-4はCⅡ類でも古式のタイプで、新延貝塚(木村1980)から出土している。白色大理石製でやや改変を受けている。図2-5は大牟田古墳群(烏津1978・山崎1987)の封土中から発見¹⁾された。CⅡ類に含まれる。石材は緑色を呈し緑色片岩の一種とみられている。なお、図は写真から起こしたもので略測図である。図2-6はBⅠ類で広田遺跡(小池1980)から出土した。報告では蛇紋岩質²⁾とされるが、九州出土の玦状耳飾で同様の石材を用いたものを、今のところ見たことがない。緑がかかった暗灰色で、欠損面は半透明の緑灰色を呈する。図2-7は北宇土池遺跡(山下1997)出土で、BⅠ類に属する金環形である。表面が荒れており、かろうじて玦状耳飾と判断することができる。褐色の滑石製である。図2-8は福岡市の田島尾子森遺跡から出土³⁾した長脚形で、FⅠ類に分類できる。残存長は5.4cmを測り、復元すると6cm程度になろう。蛇紋岩製である。図2-9は下見遺跡(富永1985)、図2-10は中村石丸遺跡出土(水ノ江1996)で、ともに破損部が大きい。下見遺跡例はBⅡ類になろう。図2-11・12は法華原遺跡から出土(金関1957・梅原1971・九州歴史資料館1982・水ノ江・林1999)したもので、11はEⅠ類で灰白色の軟玉質、12はCⅡ類で白濁色の軟玉質⁴⁾である。12の補修孔には紐ずれが認められる。図2-13は釣川遺跡(中村1982)のものでGⅠ類、図2-14は牛頸川川床採集(林2005)のDⅠ類、図2-15は貝元遺跡(中間1999)から出土したBⅡ類の古式のものである。15は軟玉質で包含層からの出土である。図には示していないが天神橋貝塚(九州縄文研究会2005)からも1点出土している。そのほか、広川町の尻高遺跡⁵⁾で緑色片岩製のFⅠ類が1点出土していることを追加しておきたい。なお、もう1点未確認ではあるが福岡県内からの出土例があるらしい。

(2) 佐賀県

3遺跡3点の出土がある。図3-1は中小路増富遺跡(徳富1986)から出土したもので、C

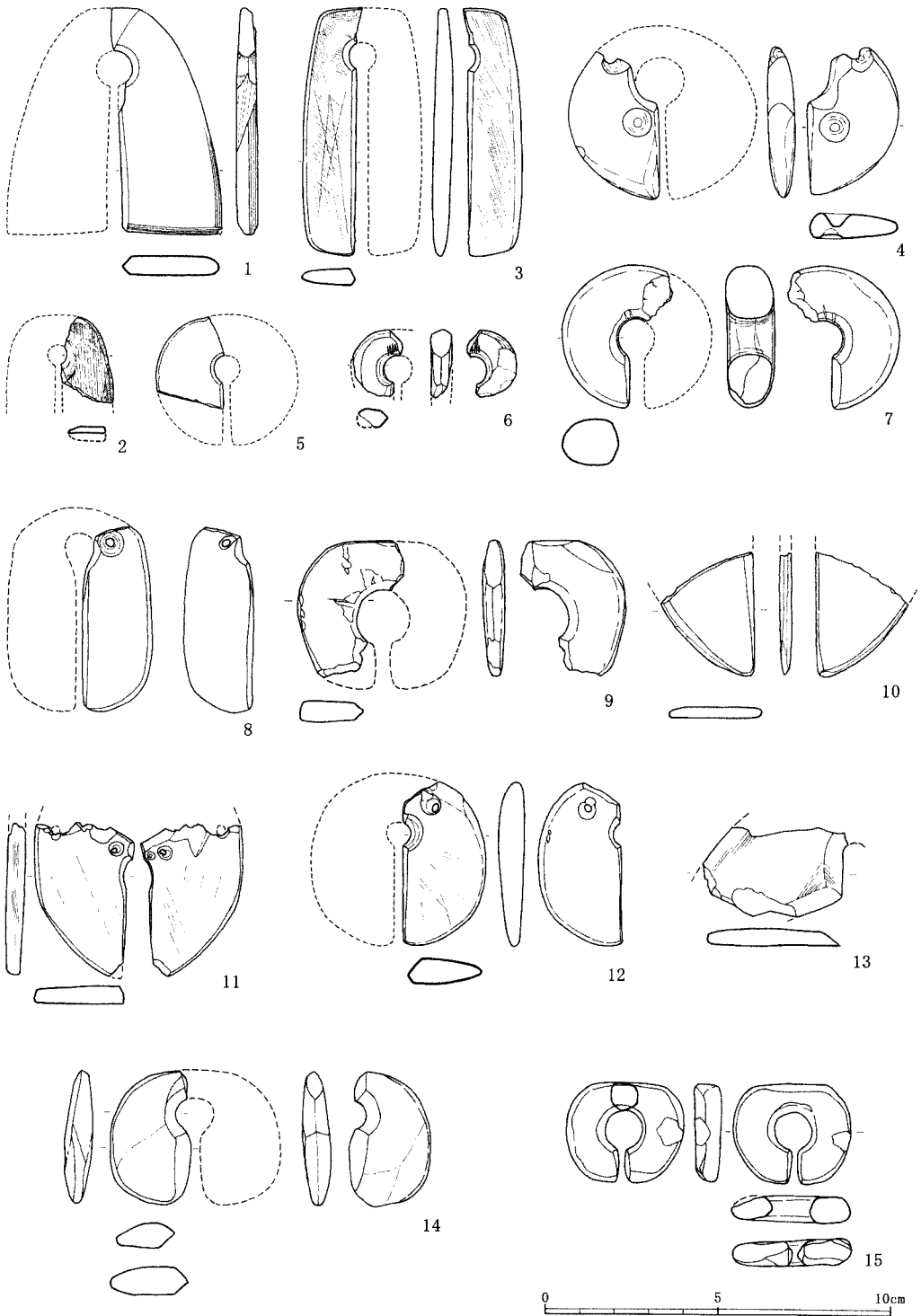


図2 福岡県出土の玦状耳飾 (1 / 2)

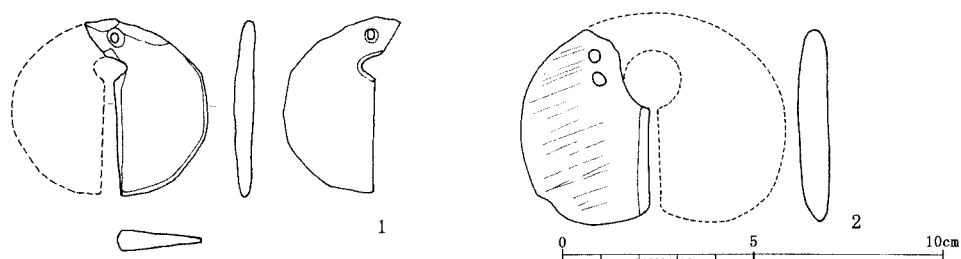


図3 佐賀県出土の玦状耳飾（1／2）

Ⅱ類である。報告書の写真では良質の石材が使用されているように見える。図3-2は戦場ヶ谷遺跡から出土（七田1934a・1934b・松尾1935）した学史的に有名な資料⁶⁾である。横楕円形のDⅡ類で蠟石製と報告されている。そのほか礫石B遺跡（九州縄文研究会2005）からも出土例がある。

（3）長崎県

長崎県からは10遺跡15点 + a が出土している。A類からG類まですべての形態が存在する。図4-1は小ヶ倉A遺跡で採集されたものではあるが、遺跡は草創期から早期の限られた時期であり、形態的に古い様相を持っている。環体は厚みを持ち、環体の幅よりも中央孔が大きいAⅡ類である。石材は黒っぽい色を呈するやや軟質の蛇紋岩と報告（辻田・竹中2003）されている。九州における出現期の玦状耳飾を考える上で重要な資料である。図4-2もAⅡ類に分類されるもので、伊木力遺跡（福田1997）からの出土である。白っぽい軟質の蛇紋岩と報告されている。図4-3は根比呂池遺跡出土（山下1996）でCⅡ類、図4-4は黒丸遺跡出土（町田1996）で、環体の一部しか残っていないが、BⅡ類かCⅠ類に分類できよう。図4-5は百花台遺跡（杉村1988）から出土したもので、CⅡ類である。図4-6～11は小値賀町の野崎島に所在する野首遺跡（塚原2001・2003）から出土した玦状耳飾である。全部で6点あり、鹿児島県の荘貝塚とともに九州では最も出土数が多い。6・7はCⅡ類に属し、6は縦の長さが5.45cm、復元するとやや幅が広がる。半透明の淡い灰緑色を呈し軟玉質である。石材は曹長石ではないかと報告されている。7は全体にローリングを受けており、石材は緑色片岩とされている。8・9は石庖丁形をとるGⅢ類である。ともに風化した滑石製で、中央孔は意識しつつもかなり退化しており、見かけ上は切目だけになっている。9も切目の一部が観察される。10・11は長脚形のFⅠ類である。10は細身でシャープな作りである。石材は蛇紋岩であるが、見かけよりも軽い。火を受けたのであろうか。11は緑色片岩製で、折損面に2次的な研磨が加えられている。野首遺跡の玦状耳飾は、扁平円形と長脚形・石庖丁形の2時期に分けられる。図4-12も野首遺跡から出土したもので、玦状耳飾に伴う篋状垂飾に似ているので参考例

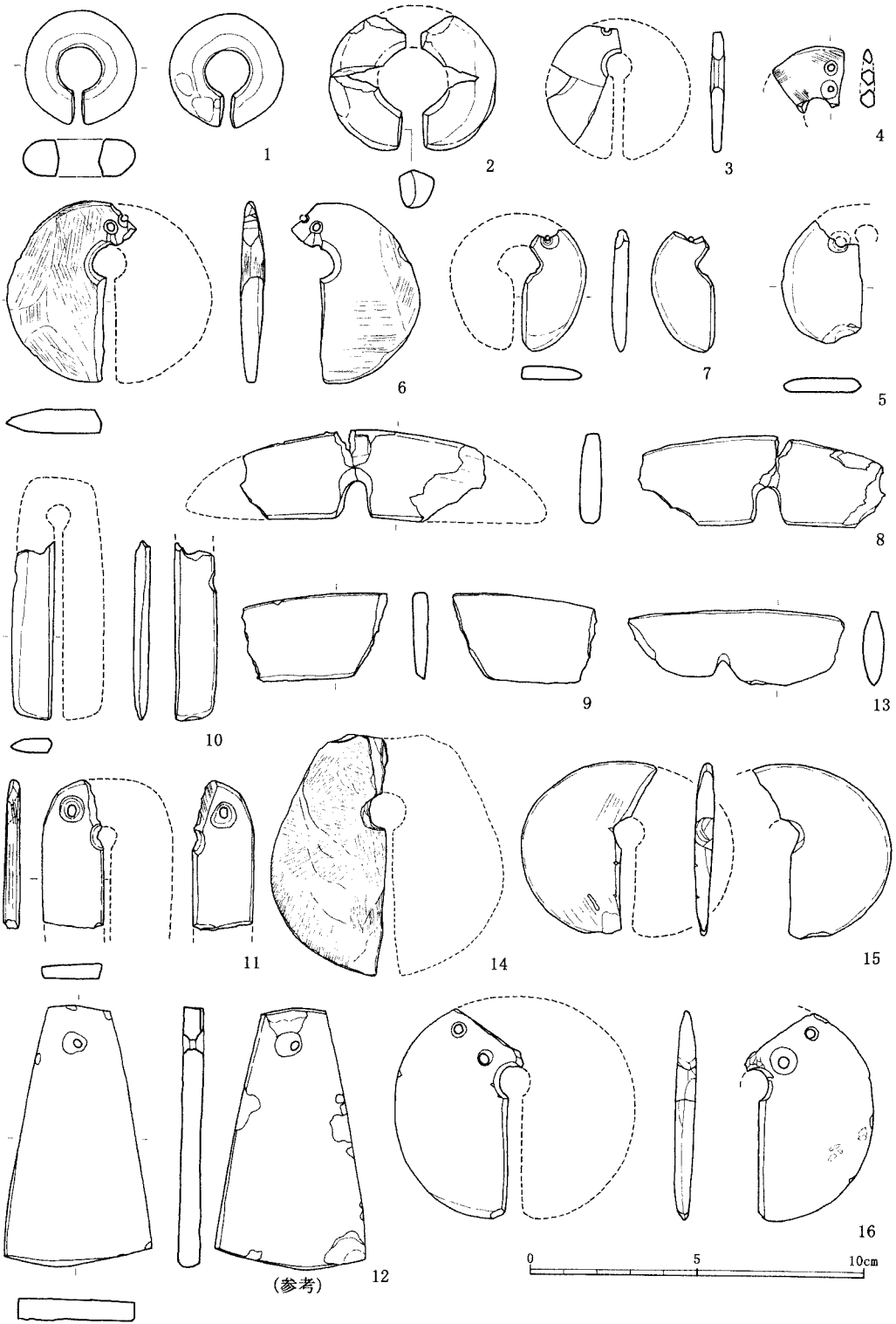


図4 長崎県出土の珧状耳飾 (1/2)

としてあげた。ただ、下端部はうすく尖らない。図4-13は宮下貝塚出土例（川道1998）で、GⅢ類である。野首遺跡出土のものに類似するが、切目がさらに退化している。石材は風化しているため確実ではないが蛇紋岩と報告されている。図4-14は下本山岩陰（麻生1972）から出土したイタボガキ製で、EⅡ類である。半折しており、縦の長さは7.2cmを測る。貝製品は他に高又遺跡の例がある。図4-15・16は門前遺跡（杉原・松尾2008）から出土したもので、15はやや楕円形を呈しDⅠ類、16はCⅡ類になる。16は径が大きくCⅡ類では九州最大である。ともに玉質であると報告されている。そのほか、姫貝塚（賀川1971）からは複数の玦状耳飾が出土⁷⁾しているらしいが、実態は不明である。

（4）熊本県

これまで16遺跡19点が出土している。図5-1～4は轟貝塚（濱田他1920・樋口1933・下村1980・藤本2008）出土で、1・2は環体の幅よりも中央孔が大きいAⅡ類、3はBⅡ類、4はEⅠ類である。1～3は白色大理石（結晶質石灰岩）製である。ひとつの基準となる資料である。図5-5は東方遺跡（高山1968・乙益1980）から出土したもので、CⅡ類である。縦の長さは4.9cm、横幅は5.5cmで、厚さ0.6cmを測る。灰緑色をした軟玉質の石材が用いられている。図5-6は八峰遺跡（乙益1980）⁸⁾出土品で、縦の長さは5.2cm、横幅は復元すると6.1cmになり、やや横広のDⅠ類になる。厚さは0.6cmで、表面に粗い研磨痕が残る。石材は灰緑色の軟玉質である。図5-7・8はいわゆる指貫形でAⅢ類に属する。7は松ノ木坂遺跡（小畑1981）からの出土で、淡灰緑色半透明の滑石製⁹⁾である。8は梅ノ木遺跡（亀田2001）から出土した新例である。復元径は3.3cmで正円になり、軟玉質の石材が用いられている。九州では古式の玦状耳飾に一定程度、指貫形が存在することが明らかになった。図5-9は方形のBⅢ類で、伊野遺跡（田中1965）から出土している。淡い緑灰色を呈した半透明の軟玉質¹⁰⁾で、中に白斑を含む。草垣上ノ島例によく似ている。図5-10は石の本遺跡（池田2001）から出土した古式のBⅠ類である。灰緑色を呈した良質の滑石製である。図5-11は沖松遺跡出土（古城1996）のCⅡ類である。図5-12は曾畑貝塚（江本1988）から出土したもので、破損しているがEⅠ類になろう。石材は灰緑色のチャートである。今のところ、実見した物の中では、硬度の高い石材を使用したものはこれ1例だけである。写真2-26は瀬田裏遺跡（富田1998）から出土したEⅡ類、写真2-29は新南部遺跡出土（富田1998）のCⅡ類で、滑石製である。そのほか、図は示していないが、別府遺跡（木崎他1997）、阿高貝塚（島津1983）、村山遺跡（島津1983）、襟ノ平遺跡（鈴木1987）、袴野遺跡（鈴木1987）などからの出土例がある。

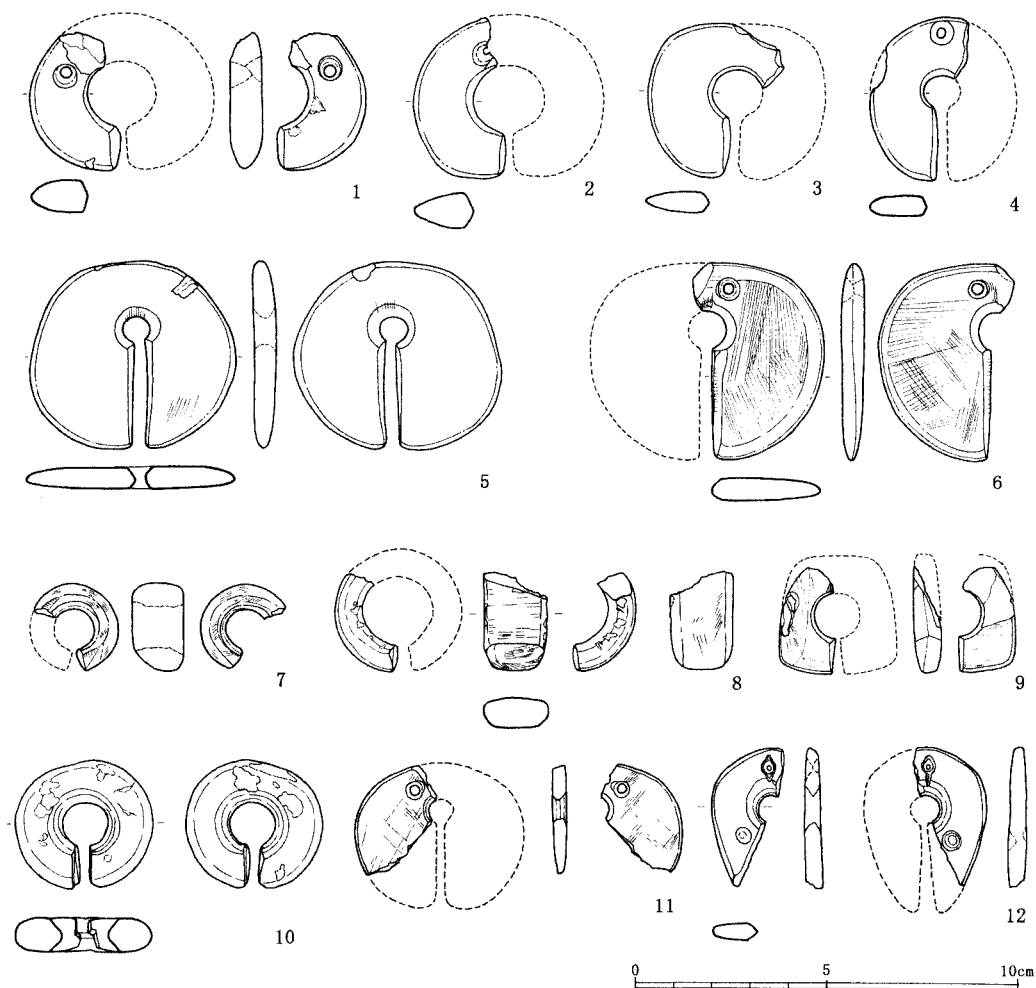


図5 熊本県出土の玦状耳飾 (1/2)

(5) 大分県

11遺跡15点が出上している。図6-1は粉洞穴(賀川1980・1982・1998)で、轟B式土器の包含層(第IV層)から出土した。白色大理石製で、円環形のA I類である。大形で、外径は6.4cm、環体の幅1.1cm、厚さ1.15cm、中央孔4.2cmを測り、正円形となる。環体は両面に平坦に研磨した後、周縁部にも研磨が加えられ不明瞭な稜が残る。全体に浅い研磨痕が観察され、中央孔側はリング状の擦痕、切目には縦の擦切痕がみえる。図6-2~4は学史的に有名な川原田洞穴(岩尾・酒匂1964)の出土品である。2・3はA III類で獣骨製、4はB II類で、灰緑色の軟玉質石材が用いられている。図6-5はA II類の古式で、太田原遺跡(下村2009)から出土した。灰緑色軟玉質で中に細かな黒い粒子を含む。図6-6は岩戸遺跡(下村2009)から出土した長脚形F I類で、縦は5.6cmある。灰緑色半透明の滑石製で、全体に磨滅してい

る。補修孔には横方向に著しい紐ずれ痕が観察される。図6-7は野鹿洞穴(賀川1973)から出土した。横に広いDⅡ類で白色大理石製である。図6-8も白色大理石製で石原貝塚(清水・坂本他1979)の後期土器包含層下部の砂礫層で出土したものである。CⅡ類に属する。図6-9はCⅠ類で、長野西遺跡(坂本1990)から出土した。石材は滑石と報告されている。図6-10は岡遺跡出土品(原田他2007)でBⅡ類に属する。淡灰緑色を呈する軟質の緑色変質岩製と報告されている。図6-11は上野遺跡(栗田他1990)から出土したDⅠ類で、白色大理石が用いられている。図6-12は大分で初めての石庖丁形を呈するGⅡ類の例である。大肥吉竹遺跡(渡邊2004)から出土した。図6-13~15はかわじ池遺跡(佐脇1998)でまとまって出土した。FⅠ類で蛇紋岩製と報告されている。

(6) 宮崎県

9遺跡10点の球状耳飾が出土している。古式のタイプが多く、アカホヤ火山灰下位から出土しているものがある。図7-1~5はともに古式のBⅡ類である。1は下猪ノ原遺跡(秋成・富田2004)でアカホヤ火山灰下位から出土したものである。扁平で淡緑色を呈する蛇紋岩製と報告されている。2は荒迫遺跡(和田・久木田1998)出土品で滑石製とされている。3は頁岩製で永徳第Ⅱ遺跡(廣田2003)から出土している。これまで見たことのない作り¹¹⁾で、アカホヤ火山灰下位からの出土である。4は前ノ原遺跡(森田1998)から出土したものである。玉質で両面を平坦に加工する。5は中野原遺跡(太川2007)出土品¹²⁾である。環体は幅広の楕円形でやや丸みをもつ。注目すべきは下辺部に穿孔を施し、切目の方向に溝を入れるということである。環体の形状は違うが、神奈川県の上浜田遺跡や静岡県の上畑上遺跡出土例などと共通の要素を持っているということは重要である。九州地方では下端部に穿孔を施すのはこれ1例だけである。石材は玉髓と報告されている。図7-6・7は内小野遺跡(東2000)から出土したもので、6がFⅠ類、7はCⅠ類に分類できよう。図7-8は走持遺跡(上田・桑畑1997)出土で上辺の一部のみである。図7-9は横楕円形で下端が直線的になるDⅢ類である。童子丸遺跡(上田・桑畑1997)から出土している。縦は4.1cm、横幅は復元すると7.0cm以上になる。8・9とも蛇紋岩製である。なお、図は示していないが、松添貝塚(鈴木1987)から滑石製の長脚形球状耳飾が1点出土している。そのほか、確認はしていないが、田代ヶ八重遺跡出土の蛇紋岩製垂飾りは石庖丁形GⅡ類の半折品(縄文研究会2005)ではなかろうか。

(7) 鹿児島県

鹿児島県からは、現段階で26遺跡32点以上が出土しており、九州地方では最も遺跡数が多く出土例も多い。F類以外はすべての形態が存在する。図8-1・2はBⅠ類で、1は柳井谷遺跡(瀬戸口1984)、2は今木場遺跡(上田1981)からの出土である。図8-3は南一ノ谷遺跡

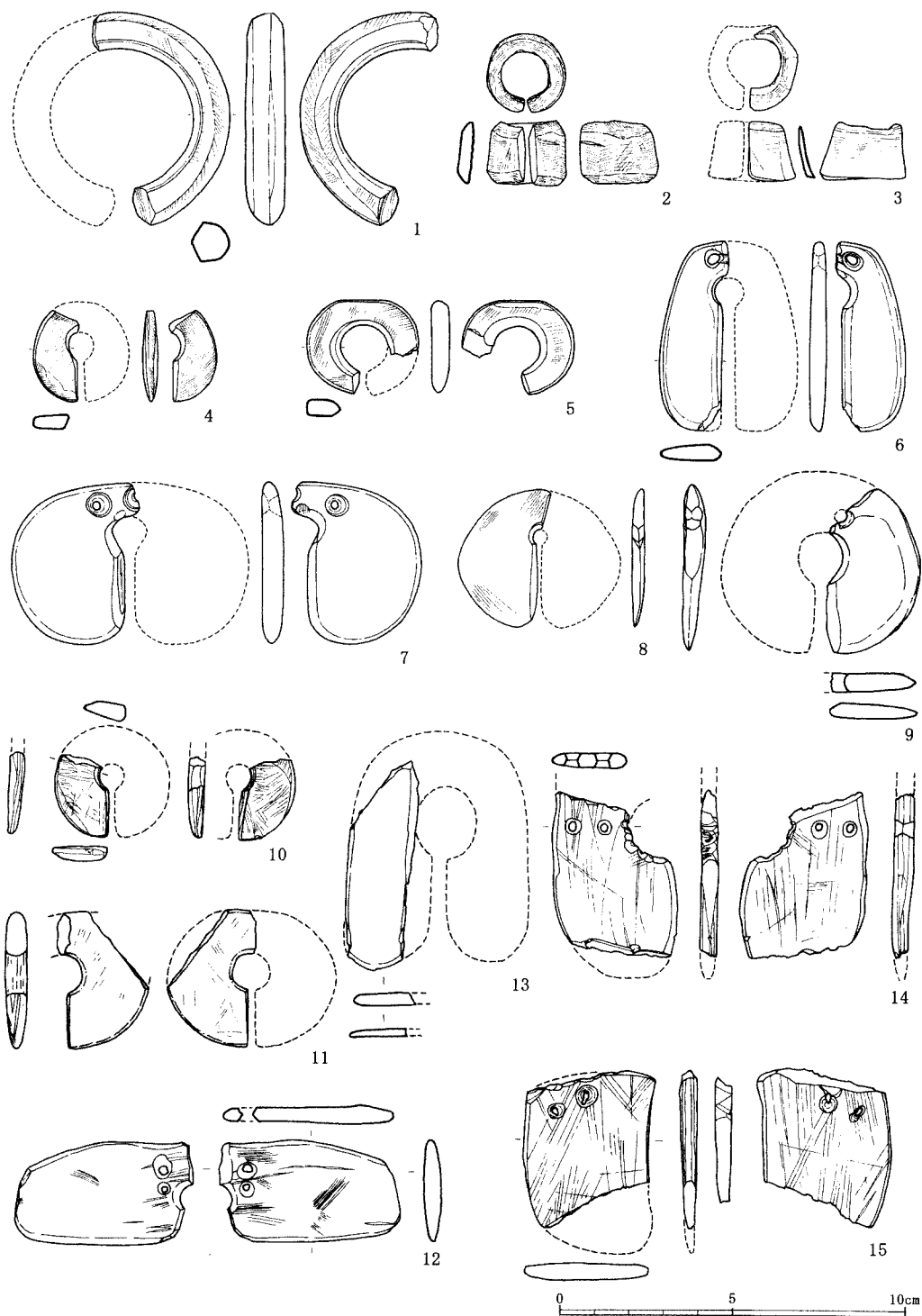


図6 大分県出土の玦状耳飾 (1/2)

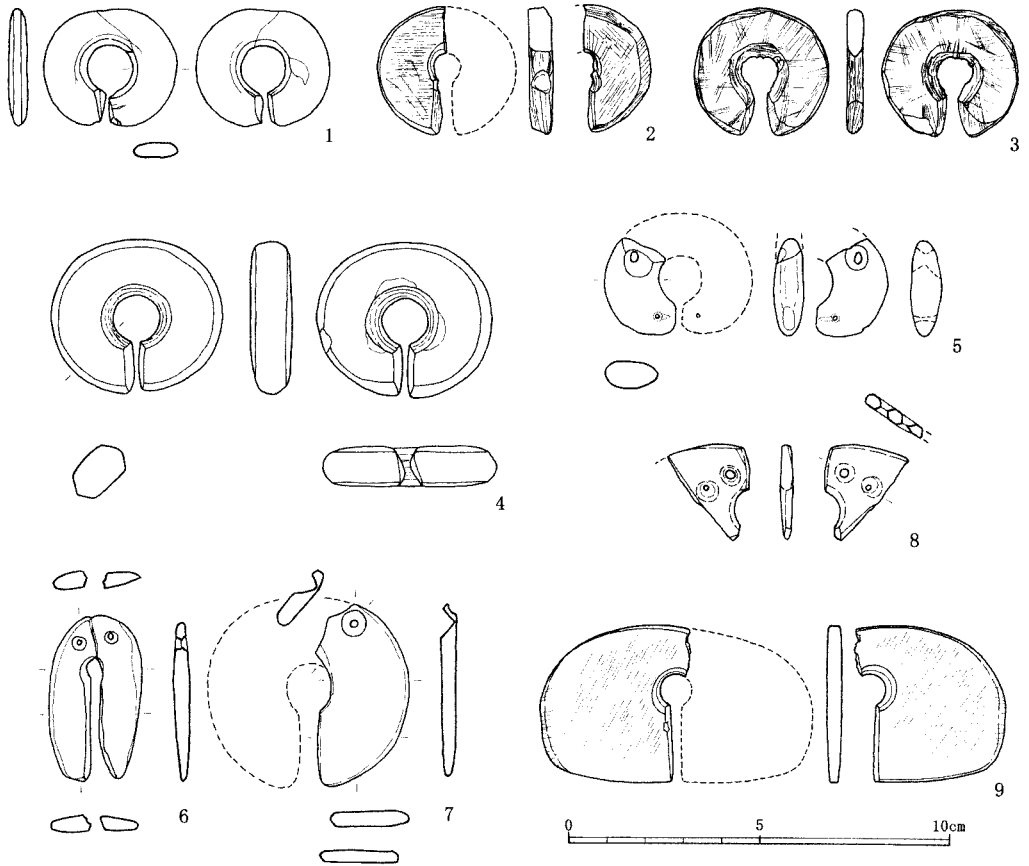


図7 宮崎県出土の玦状耳飾 (1/2)

(上田・雨宮2003) 出土で、折損しており、切目は確認されていない。図8-4~9は荘貝塚(池水・長野他1979)から出土した一群である。全部で6点¹³⁾あり、そのうち6以外の5点はすべて白色大理石(結晶質石灰岩)製である。4は上辺部の破片のみで全形を知りえない。5はAⅡ類で、径4.3cm、環体の幅1.5cm、厚さ0.65cmを測り、両面は平坦に研磨され、周縁も平坦に整形されている。極めてシャープな作りである。6は小型品でCⅡ類に属し、現存長は2.15cm、両面は平坦に研磨され、研磨痕が残る。扁平で黄褐色から茶褐色を呈し、石材はチャートではなく硅化木であろうか。7は縦楕円形のEⅡ類である。半分から折損しており脚端の一部を欠く。両面は平坦に研磨され、側縁は面取り状の整形が加えられる。復元長は5.1cm程度になろう。8もEⅡ類で、縦に長い大形品である。本来は縦の長さが7cm以上あったものとみられる。厚さは0.65cmである。7と同様両面は平坦に研磨され、側縁は一部に面取り状の整形を加え、平坦に仕上げている。これも極めてシャープな作りである。9はCⅡ類に属し、中央部で折損し脚部を欠く。復元すれば、縦の長さ5.4cm前後、横幅6.3cm前後

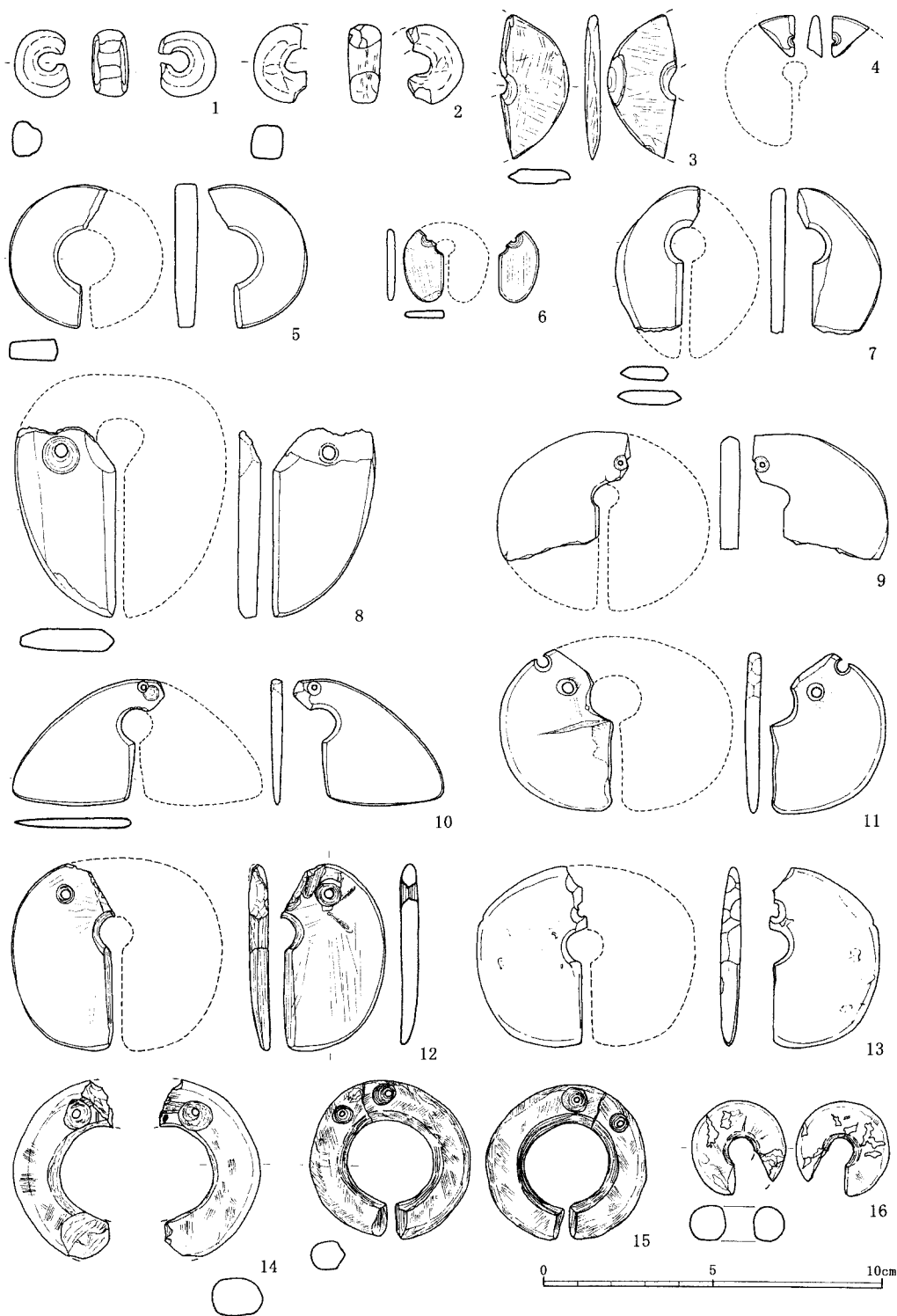


図8 鹿児島県出土の玦状耳飾 (1) (1/2)

になろう。整形は他のものとよく類似している。以上6点は形態的には変化に富んでいるが、1点以外は石材も同じで同工の観がある。純粹に轟B式と共伴しており、ひとつの定点となりうる資料である。図8-10は烏越遺跡¹⁴⁾(上田1981)出土のG I類である。縦は3.8cmで、幅は復元すると7.5cm程度になろう。極めて扁平に作られている。茶褐色を呈するが蛇紋岩製であろう。図8-11はD II類で、阿多貝塚(戸崎・青崎他1978)出土品である。補修孔には紐ずれがみられる。灰緑色で黒の微細な粒子が含まれており、軟玉質である。図8-12は上野原遺跡(中村・八木澤他)出土で、C II類である。図8-13はD I類で長音寺遺跡(本田・雨宮1989)出土である。図8-14は円環形のA I類である。黒武者遺跡(池畑2008)出土で、切目を欠くが古式の玦状耳飾である。石材は滑石と報告されている。図8-15もA I類で梶ノ原遺跡(上東・福永2000)から出土した。研磨痕が残り、報告ではろう石とされている。図8-16は三角山I遺跡(藤崎・中村2006)でアカホヤ火山灰下位から出土したB I類で、滑石製と報告されている。図9-17は西之蘭遺跡(池畑・長野1978)から出土した端正な作りのC II類で、石材は緑色地に黄色の斑が入り、広義の緑色片岩に属するものではなかろうか。補修孔には顕著な紐ずれが認められる。図9-18は扁平で中央孔が真ん中にくるC I類である。倉園遺跡(立神・中村1978)から出土¹⁵⁾したもので、縦4.8cm、横幅5.2cm、厚さ0.5cmを測る。石材は緑色味を帯びた淡青灰色の軟玉質である。図9-19・26は南田代遺跡(本田・雨宮1989)出土品で、ともにC II類に分類できる。26は折損部を繋ぐため、対の補修孔を多くあけている。図9-20は上焼田遺跡¹⁶⁾(出口・池畑1977)から出土したもので、B類からC類への移行形態を示す。淡灰緑色半透明の滑石製で、現存長は4.0cmを測り、ほぼ正円に近く断面はやや厚い。とりあえず、切目は長いがB II類に分類しておきたい。図9-21は泉川遺跡(河野1972・国分1976・鮫島1978・上田1981)出土のC II類である。上辺の補修孔には紐ずれが観察される。幾分緑色味を帯びた灰色から上半部は黒っぽい色調を呈し、軟玉質である。図9-22は高又遺跡(柴尾1979)から出土したもので、両脚を欠損した玦状耳飾と考えられる。よく研磨が行き届き、上辺は直線的に整形され、周縁は面取りがなされている。貝製品でシャコガイ製であろう。図9-23は大形のD II類である。枕崎市の南西海上に浮かぶ草垣上ノ島遺跡(河野1972・河川1972・国分1976・上田1981)から発見された。復元すると、縦7.0cm、横幅9.5cmとなり、極めて大きく、このタイプでは九州で最大である。淡灰緑色半透明の軟玉質で、全体に白色の細かな斑点が観察される。図9-24・25は石庵丁形で、24は仁田尾遺跡(池畑1994)出土のG II類、25は市ノ原遺跡(元田・牛ノ濱他2003)出土のG III類である。25は復元すると幅が13cm程度になり、これもこのタイプでは九州最大である。25は完形品で中央孔が退化している。25・26はとも蛇紋岩製である。中央孔が退化した玦状耳飾は長崎県五島列島に類例がある。図9-27は打馬平原遺跡(瀬戸口他1988)から出土した垂飾¹⁷⁾である。参考例としてあげた。また、勝毛遺跡(縄文研究会2005)からも蛇紋岩製のG III類に属する人形の玦

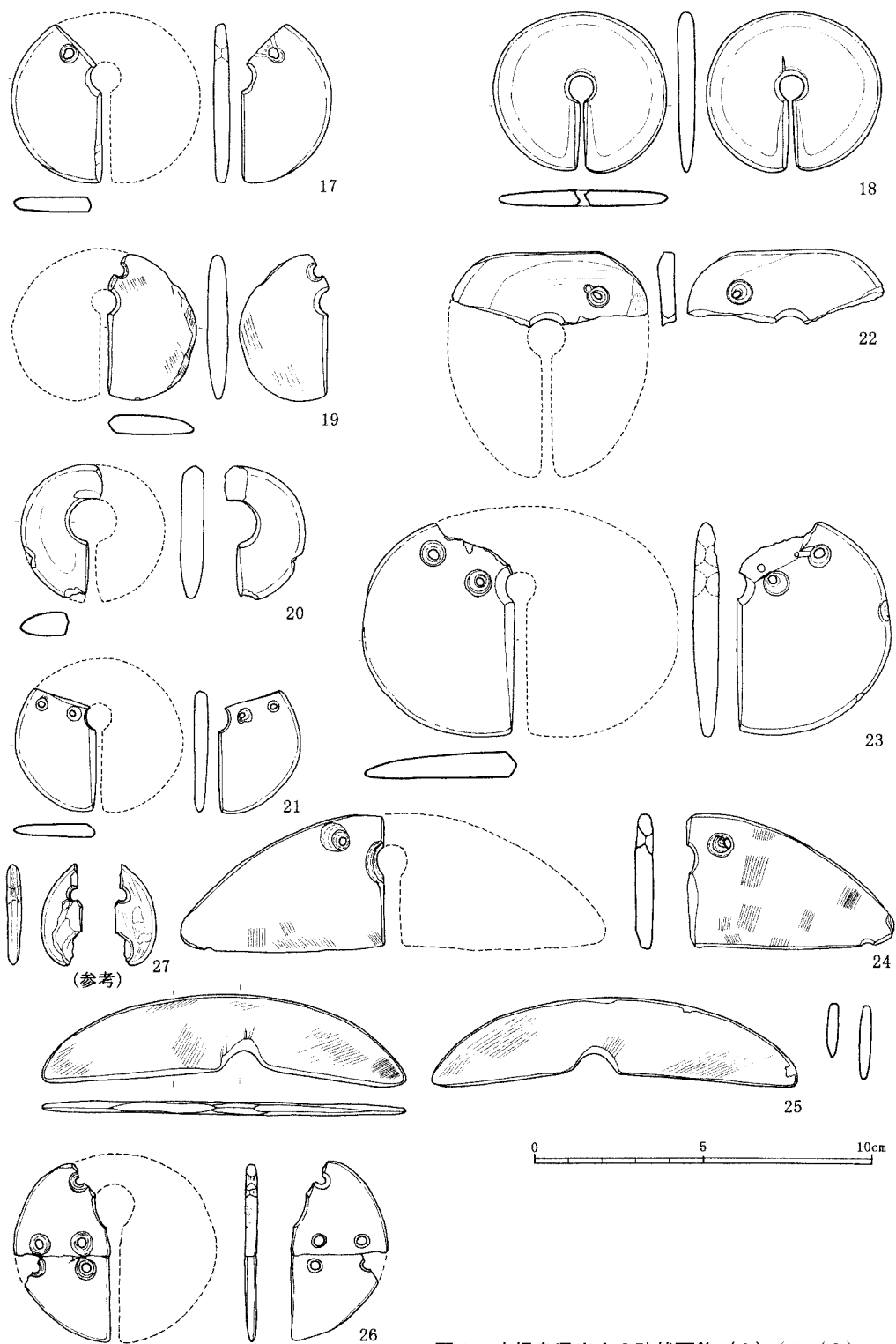


図9 鹿児島県出土の玦状耳飾 (2) (1/2)

状耳飾が出土している。石打遺跡（縄文研究会2005）出土の2点の蛇紋岩製垂飾品もGⅢ類の可能性が高い。見直せばさらに類例は増加するものと考えられる。そのほか、江川野遺跡（池畑・長野1978・池水・長野他1979）、永山遺跡（寺師1943・1978・河口他1964）、鹿大工学部（上田1998）、市ノ原遺跡第3区（上田1998）、石打遺跡（上田1998・九州縄文研究会2005）などから出土例の報告がある。

4. 基礎的検討

以上、各県の出土例を概観してきたが、ここではその資料をもとに、いくつかの項目について基礎的な検討を行っておきたい。

（1）出土遺跡の分布

まず、玦状耳飾の出土した遺跡の分布からみておこう。図10はその遺跡分布図である。出土遺跡は各県にまたがっているが、福岡県、佐賀・長崎県、熊本県、鹿児島県と九州西半部に多くみられ、特に鹿児島県の薩摩半島に多く集中している。地域的には、島嶼部、沿岸部、内陸部に分けられるが、主に内陸部では大河川やその支流域に分布していることがわかる。たとえば、川内川、球磨川、緑川、白川、筑後川、遠賀川、大野川、大淀川などの流域が目されるところである。AⅡ類やBⅠ・BⅡ類など古式の玦状耳飾の分布を見てみると、各県に満遍なく認められ、大分県や宮崎県にも分布している。玦状耳飾を伴う九州各県の遺跡の分布は、いわゆる縄式土器（A式、B式、C式を含む）の分布圏と重なるのである。

ここで、複数出土している遺跡をあげると、福岡県の沖ノ島で2点、長崎県の門前遺跡で2点、同じく五島列島の野首遺跡で6点、熊本県の轟貝塚で4点、大分県の川原田洞穴で3点、同県のかわじ池遺跡で3点、鹿児島県の荘貝塚で6点、同じく南田代遺跡で2点ということになる。沿岸部や沿岸部近く、あるいは島嶼部の遺跡から複数の玦状耳飾が出土していることは注目される。特に、九州西海岸側を含む西半部に多くの玦状耳飾が認められるということは、同地域で盛行したことを物語っている。

（2）形態変遷

つぎに、完形か完形に復元できるものを中心に、縦軸に縦の長さ、横軸に横の長さを計測してプロットしたのが図11である。復元にやや誤差があるかもしれないが、一定の傾向は把握できるものとする。A類は、径が2cmよりもやや大きく5cm前後の領域に分布する。ただし、粉の資料は例外的に大きい。B類も分布領域はA類とほぼ同じ傾向になる。C類になるとやや大型化して、径が4cmから7.5cm前後までになり分布領域が伸びる。A類からC類までは縦と横の比が1：1のライン近くに分布するが、やや楕円傾向にある。D類はC類から分かれて

九州出土の玦状耳飾に関する基礎的検討

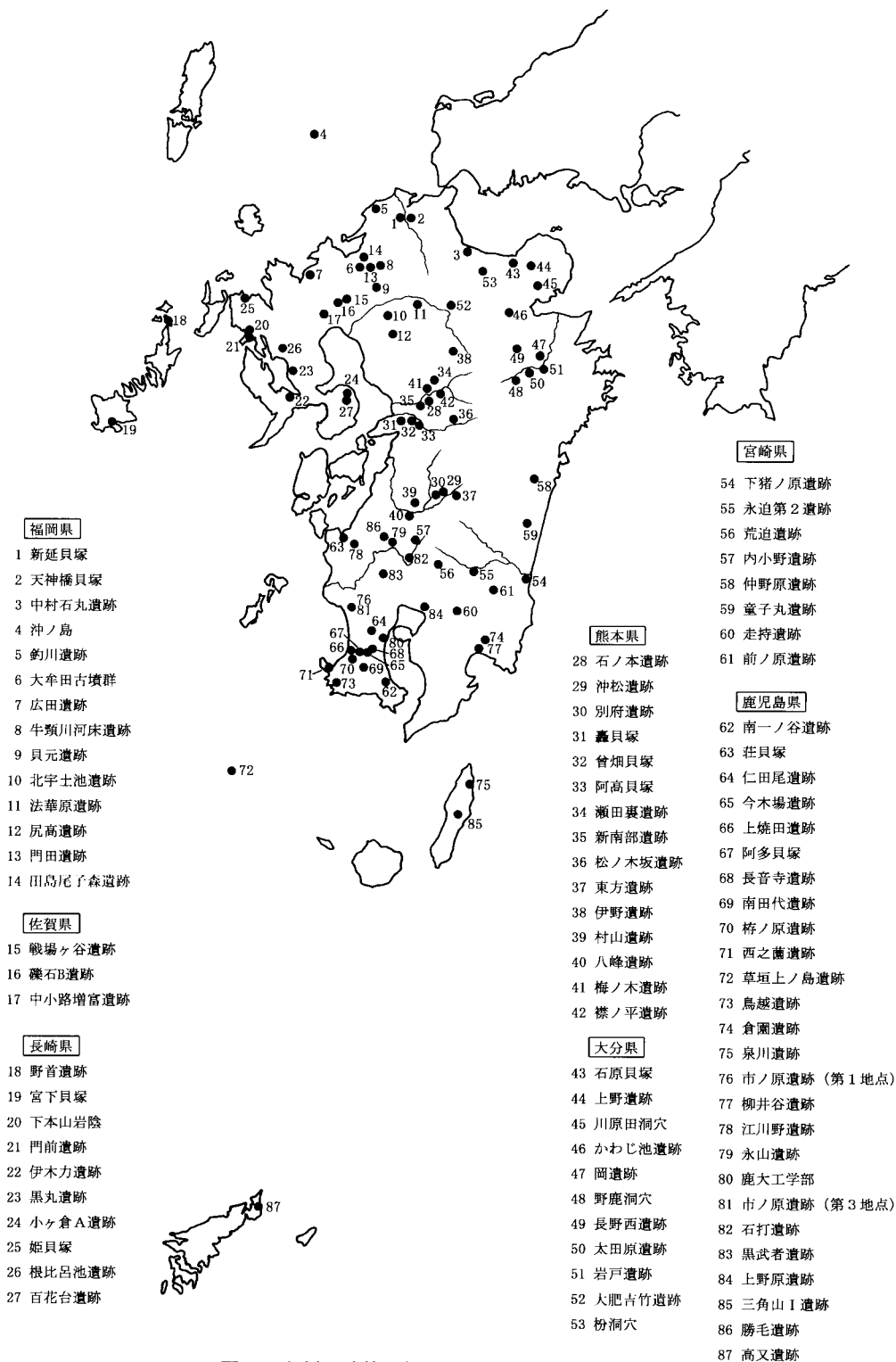


図10 九州の玦状耳飾出土遺跡分布図

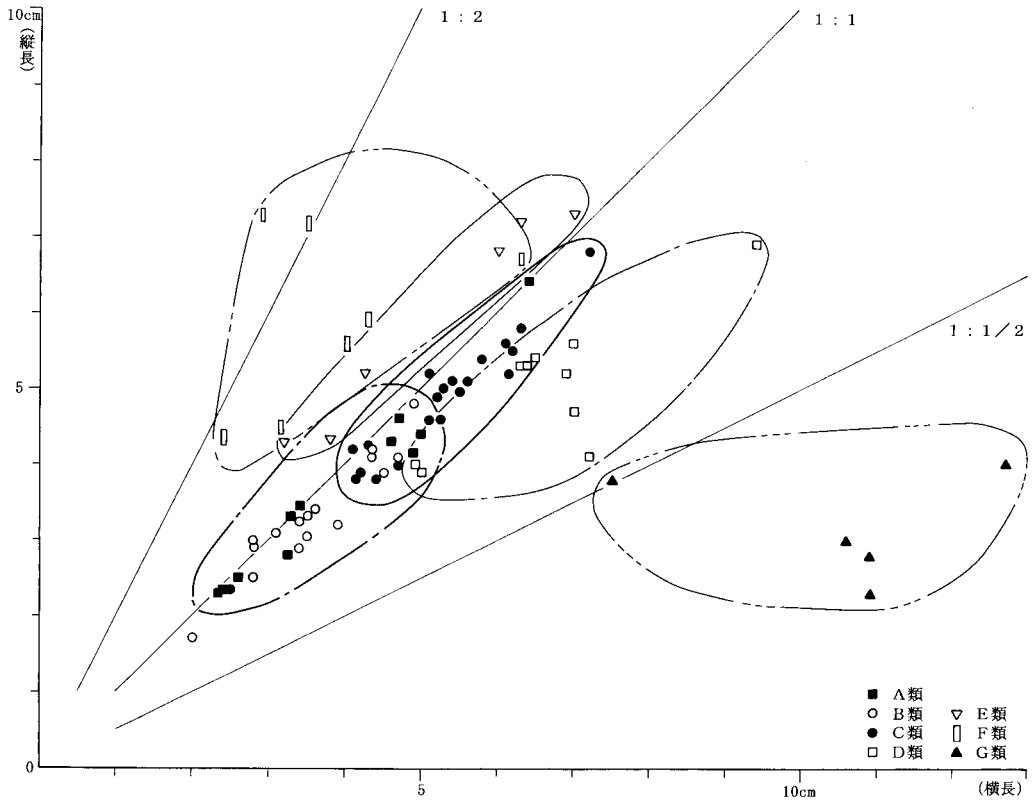


図11 九州出土の珞状耳飾形態別相関図

大型化し、楕円傾向がさらに進む。一方、E類は反対にC類から分かれて縦長傾向となり、F類はさらに細身になって脚が長く伸びる。G類は横の長さが縦の長さの2倍以上になり、大形で強く横に広がる形態となる。九州の珞状耳飾は、円環形・金環形から扁平な円形に変化し、さらに縦に長く伸びるタイプと、横に大きく広がるタイプのふたつに分かれて変化する流れがみて取れる。

(3) 編年試案

そこで、以上のことも踏まえ、九州出土の珞状耳飾について編年を試みたい。九州出土の珞状耳飾は上田耕（上田1998）が指摘するように表採品が多く、調査で出土しても包含層であったり、時期の違う層からの発見であったりと時期を確定する資料に恵まれなかった。墓壙などの遺構から出土した例はこれまで確認されたことがない。しかし、轟B式と伴出することはこれまで多くの遺跡で確認されている。荘貝塚例は純粹に轟B式に伴っており、ひとつの定点とすることができる。最近、新東晃一はアカホヤ火山灰下位から出土した珞状耳飾をもとに、九州における始源期の珞状耳飾のタイプを明らかにした（新東2008）。今回、九州全体を通じて

九州出土の玦状耳飾に関する基礎的検討

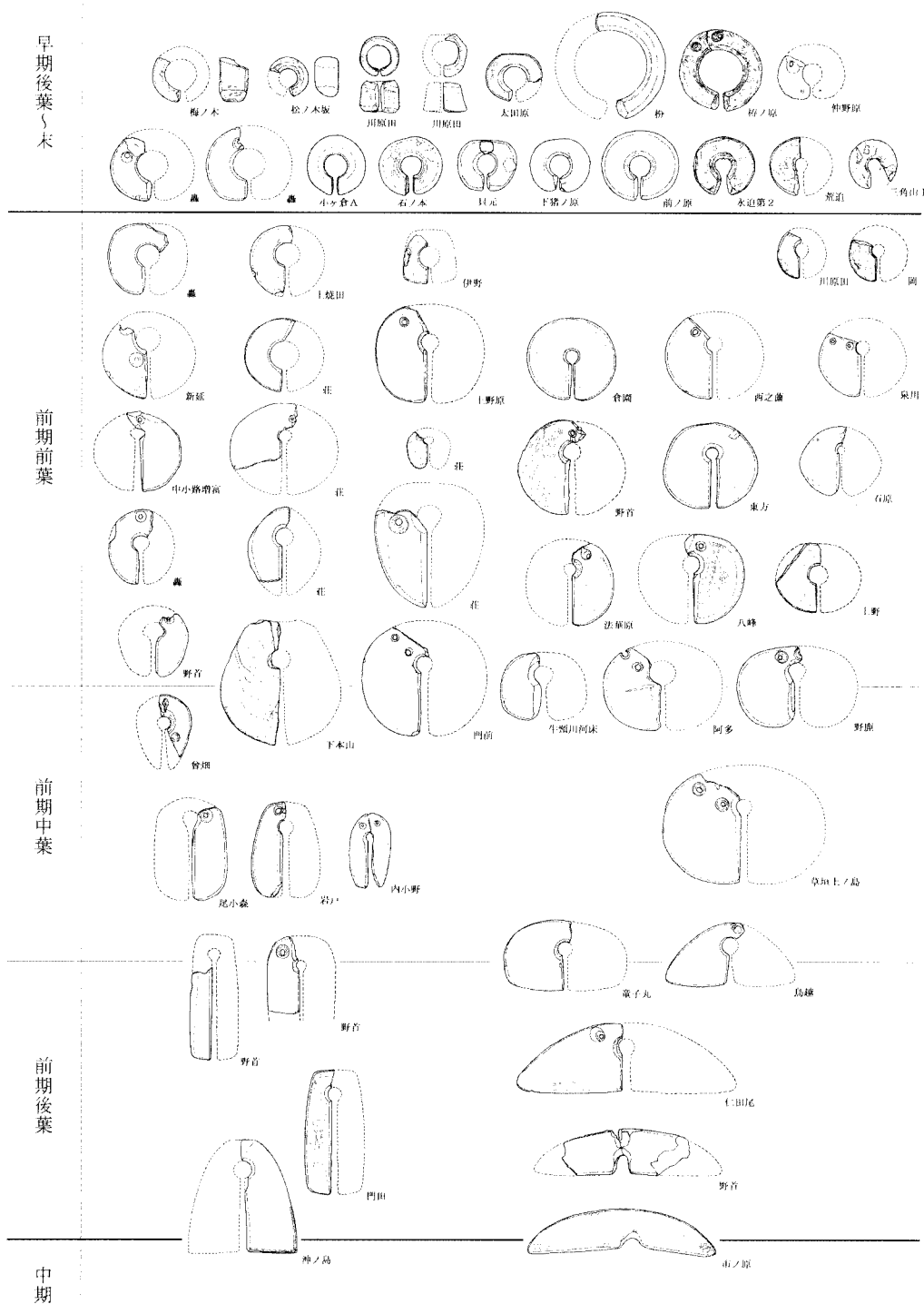


図12 九州出土の玦状耳飾編年試案 (1/4)

資料が収集できたので、土器との共伴関係を考慮しつつ形式学的変遷を加味し、玦状耳飾の終焉まで含めて、これまで課題であった編年を試みたい。

図12はその編年試案である。アカホヤ火山灰の下位から出土するものと、それらと形態的に同類に分類されるものを早期に位置づけた。円環形のAⅠ・AⅡ類、指貫形のAⅢ類、金環形のBⅠ類とBⅡ類の一部がこれにあたる。BⅠ類とBⅡ類の一部については轟A式土器に伴う（廣田2003）。また、九州では古い時期に一定程度指貫形が存在するのでAⅢ類も早期に含めた。早期に位置づけたこれらの一群は、実際には前期の層から発見される場合もあるので時期幅を考慮する必要がある。前期初頭になると新しいタイプのBⅡ類・BⅢ類が登場し、前葉ではCⅡ類が盛行する。庄貝塚ではAⅡ類、CⅡ類、EⅠ類が存在し、白色大理石で作られ調整もきわめて類似したものになっている。轟B式の新しいタイプと共伴するので、形態分化はこの時期に発展するものとみられる。前葉の終わり頃にはDⅠ類やEⅠ類が登場し、前期中葉にはEⅡ類やDⅡ類へと変化し、二極分化が進む。中葉から後葉にかけては長脚形のFⅠ類やFⅡ類、横楕円形のDⅢ類、三角形のGⅠ類や石庖丁形のGⅡ類・GⅢ類へと変容する。これらの新しいタイプは下端部が直線的に仕上げられ、退化しつつ中期初めには終焉を迎えるものと考えている。

以上、九州では初源期から終焉までの形態変遷と系譜関係はたどれるが、中葉から後葉の土器形式との関係がはっきりしない。しかし、前期初頭から前葉を中心に展開した轟B式土器に伴うことは明らかであり、この時期に最も発展を遂げた耳飾であるということは間違いなからう。この編年試案については、今後の発掘調査で検証しなければならないだろう。

（4）石材および共伴土器と若干の考察

ここで、材質についても触れておかなければならない。獣骨製と貝製品がそれぞれ2点ずつ出土しているが、これらは材質転換形態であろう。ただし、白を基調としたものであり、祖形との関係を示しているとみられる。石材については報告と実見との違いがあり、報告のみで集計を凶ることには躊躇する。そこで実見したものを中心に見てみると、A類やB類では白色大理石や淡緑色（褐色系もある）の滑石と軟玉質の石材が中心となり、白色や淡緑色の玉質石材が志向されていることがわかる。この傾向はC類からDⅡ類・E類まで続くが、DⅢ類やF類・G類になると蛇紋岩や滑石が主体を占めるようになり、形態変化と共に石材への志向性も変化してきている。したがって、始源期の石材が、白色大理石や淡緑の玉質石材であるということは起源と系譜を考える上で重要である。なお、硬玉製品は1点も確認していない。

さらに、共伴土器を見てみると、アカホヤ火山灰下位のものとは轟A式土器にともなっており、アカホヤ火山灰上位では轟B式土器に伴っている（廣田2003・上田・廣田2004・新東2006・2008）。本来、早期の押型文土器や南九州の円筒土器には伴わないと考えている。南九

州では早期に耳栓が登場するが、これは別系統の耳飾である。また、水ノ江和同が指摘（水ノ江1992）するように、韓半島の影響を受けた曾畑式土器や在地系の並木式土器・阿高式土器にも伴わないとみてよからう。しかし、前期後半の玦状耳飾にはどのような土器が伴うのであろうか。今のところははっきりと答えを出せないでいる。近年、上田耕は変容した新しいタイプの玦状耳飾が春日式土器に伴うことを示唆している（上田1998）。共伴関係が明らかになれば興味深いことである。鹿児島県ではG類が卓越し、西北部九州にはF類が多く分布するが、五島列島にはこのG類がみられ、野崎島の野首遺跡では春日式土器が出土している。また、このG類は隠岐や島根県・鳥取県に集中（梅原1922）しており、何らかの関連が考えられよう。

これまでみてきたように、九州の玦状耳飾は広範囲に分布圏を持つ轟式土器文化の所産と考えられ、特にB式段階に盛行する。中期や後期の遺跡からも単発的には発見されるが、本来の時期のものではない¹⁸⁾と考えている。ただし、広田遺跡のものは今のところ判断がつかかぬている。

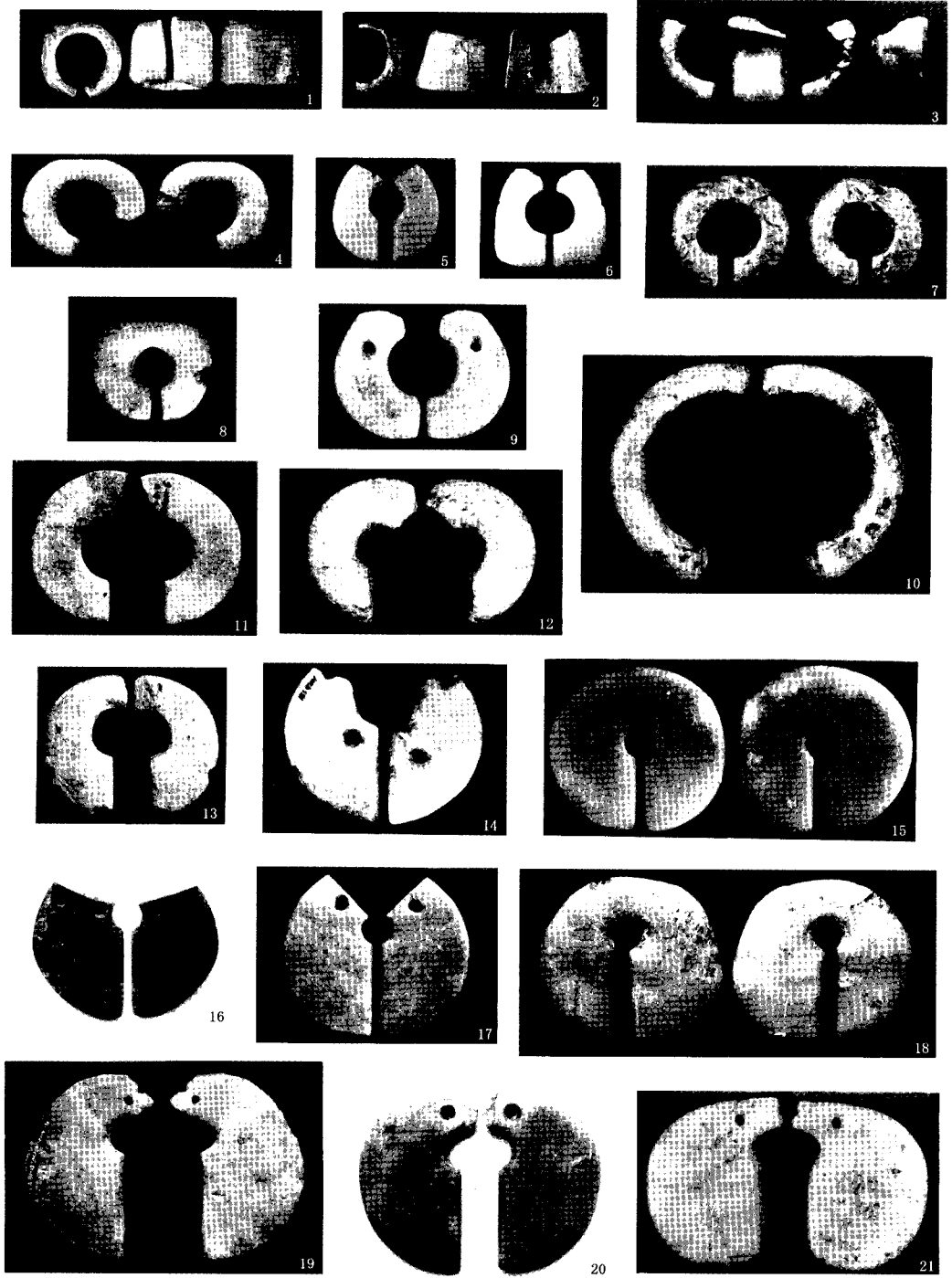
では、九州出土の玦状耳飾はどのような契機で出現するのであろうか。新東晃一は大陸からの起源には直接触れていないが、一旦日本海側で成立したものが九州へ伝わり、さらに南下したと考えている。（新東2006・2008）。上田耕も同様の「可能性を考える余地もある」（上田1998）としている。

現時点では、大陸から渡来したとみられる資料は九州にはなく、現段階では筆者も同様な考えである。近年、九州地方の玦状耳飾の資料が増加し、古式の玦状耳飾には円環形、金環形、指貫形があり、淡い緑色系の軟玉質石材や白色石灰岩製が多いことから、今後、国内をはじめ、中国江南や東北部も含めてその起源や系譜については、複数ルートでの検討が必要であろう。

おわりに

近年、アカホヤ火山灰層下位から玦状耳飾が発見され、出現時期が早期後半から末まで遡ることが明らかになった。そして、その起源や系譜の解明という新たな研究段階を迎えた。これまで九州では全体を含めての基礎的な検討がなかったので、今回試みたが、資料的な限界もあり検証しなければならない問題も多く残った。今後、墓地などの遺構に伴う調査例や確実な時期比定のできる出土資料が確認できればさらに突っ込んだ検討ができるようになるだろう。本論はその叩き台として現段階での資料をもとにまとめたものである。大方のご批判を仰ぎたい。

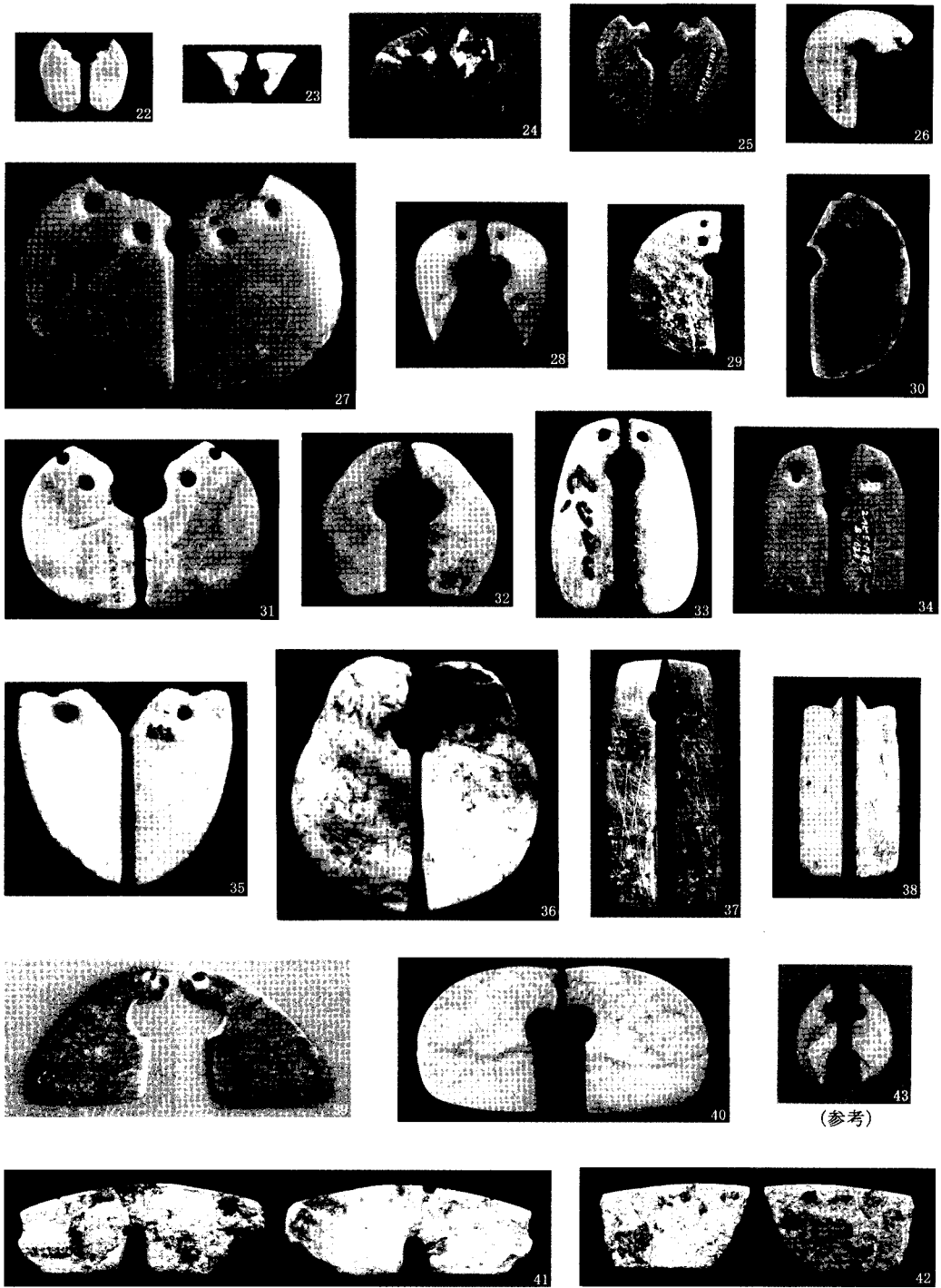
甲元先生には、学生時代に玦状耳飾の起源について極東地域も視野に入れて検討するようにご指導を受けた。現在では、中国東北部から沿海州にかけて出土する玦状耳飾が、日本の玦状耳飾の起源に関して深い関わりあいを持っていることが論じられている。先生のご指導は常に念頭に置きながら十分生かし切れていない事を恥じ入るばかりである。今回、拙い内容ではあ



1・2・5:川原田洞穴 3:梅ノ木遺跡 4:太田原遺跡 6:伊野遺跡 7:石ノ本遺跡 8:貝元遺跡 9:轟貝塚 10:粉洞穴 11:荘貝塚
 12:北字土池遺跡 13:上焼田貝塚 14:新延貝塚 15:倉園遺跡 16:泉川遺跡 17:西之齒遺跡 18:東方遺跡 19:野首遺跡
 20:八峰遺跡 21:野鹿洞穴

写真1 九州出土の玦状耳飾(1)(1/2)

九州出土の珧状耳飾に関する基礎的検討



22・23・32・35: 荘貝塚 24: 沖松遺跡 25・34・38・41・42: 野首遺跡 26: 瀬田裏遺跡 27: 草垣上ノ島遺跡 28: 曾畑貝塚 29: 新南部遺跡
30: 上野原遺跡 31: 阿多貝塚 33: 岩戸遺跡 36: 下本山岩陰 37: 門田遺跡 39: 鳥越遺跡 40: 童子丸遺跡 43: 打馬平原遺跡

写真2 九州出土の珧状耳飾(2) (1/2 ただし26・29は縮尺不同)

るが、先生のこれまでの学恩に対し些かでも報いることができればと思いまとめたものである。

先生におかれましては、ご健康にご留意され、ご活躍・ご発展をお祈り申し上げますとともにこれからもご指導を賜りますようお願いいたします。

謝辞

本稿を草するにあたり、下記の方々にご指導、ご教示、ご協力を賜りました。記して感謝いたします。

池田朋生 池畑耕一 池水寛治 井ノ上秀文 上田耕 魚屋優子 牛ノ濱修 小畑弘己 賀川光夫
亀田学 木下修 栗原和彦 小池史哲 甲元眞之 坂田邦洋 島津義昭 島田正浩 新東晃一 宗前
哲男 高木恭二 橘昌信 竹内弘 田中一義 塚原博 富永嘉久 富永直樹 鳥養孝好 長野真一
中村耕治 早水廣雄 久村貞男 平山修一 太川裕晴 古森政次 前田明 馬田弘稔 森田孝志 山
口俊博 横尾裕一 吉留秀敏 力武卓治 渡辺一雄の各氏

〔注〕

- 1) 調査に参加された島津義昭氏、平山修一氏、高木恭二氏などから発見の状況や土器の文化層についてご教示を受けた。出土は古墳の封土中であつたが、封土下には縄文早前期と考えられる条痕文土器の文化層が存在したとのことである。
- 2) 現物は1979年粉洞穴の調査の時、小池史哲氏が現場に持参されたのを実見させていただいた。石材については、その当初から疑問であつたが、同一の石材を使用したものに鹿児島県出水市清水A地点出土の棒状石製品（縄文後・晩期－吉留秀敏氏ご教示－）と熊本市周辺出土の玉類（縄文後・晩期－熊本市博物館蔵－）のひとつに類例がある。
- 3) 未報告資料であるが、福岡市教育委員会の力武卓治氏のご理解で掲載させていただいた。
- 4) (梅原1971)には硬玉品として報告されている。しかし、補修孔の紐ずれや表面に研磨痕が残るなど、石材の硬度は高いものとは考えられない。表面の滑沢さや色調などから透角閃石や陽起石などの軟玉に属するものであろう。これまで九州出土の玦状耳飾には硬玉（Jadeite）は1例も確認していない。
- 5) 広川町教育委員会の尾崎源太郎氏よりご教示を受けた。現物は以前「古墳公園資料館」で実見した。
- 6) 実物は戦災で消失したが、小林行雄氏の書かれた原図が七田氏宅に保管されている。ただ、その後七田忠志氏が亡くなられたので、以後どうなったかは分からない。この玦状耳飾は、「佐賀県教育委員会の七田忠昭氏の話しによれば、戦場ヶ谷遺跡の押型文土器が出土する地点ではなくて、轟式・曾加式が出土する地点からの採集である」と同教育委員会の森田孝志からご教示いただいた。なお、図3-2は文献（七田1934a）から拡大したもので、必ずしも正確ではない。
- 7) (賀川1971)によれば「安山岩で作られた大型の玦状耳飾や長脚タイプの耳飾りなど、かなりの数の玦状耳飾りが出土した」らしい。また、調査に参加された坂田邦洋氏から「かなりの数が出土し、形態的にも変化があり、長脚タイプが多かつた」とご教示をうけた。文献（塚原2003）の【註】(13)には、やはり調査に参加された山口讓治氏の教示内容が示されている。それによると「形状は

縦長の楕円形で完形品。石材は緑っぽい蛇紋岩だったように記憶している」とのこと。いずれにしても、アルバート・モアが発掘した資料は、報告書未刊のままアメリカから返送されて、松浦市に保管されているので公表されれば明らかになろう。ずいぶん以前にお伺いしたときは梱包したままになっていたので現物を見ることはできなかった。

- 8) 文献(乙益1980)には、この資料は村山遺跡出土となっているが、所有者に確認したところ確かに八峰遺跡出土ということであった。
- 9) 1979年11月の踏査の際、現物は名連川郵便局で実見した。その時、同遺跡から轟A式土器の尖底底部2個を採集した。もともと轟A式土器が単純に近い形で出土している遺跡なので、表採資料ではあるが参考にはなろう。淡灰緑色半透明の滑石で作った小玉も一緒に出土している。
- 10) 現物は熊本大学地質学教室の高橋俊正教授にご鑑定をお願いした。軟玉質の材は陽起石と透角閃石の中間の組成を持つものではなかろうかのご教示を受けた。また、その他の資料についても岩石学的な立場からご指導を賜った。
- 11) 研究会の折、烏田正浩氏に見せてもらったが、形状から古いものではなさそうに思えた。しかし、アカホヤ火山灰下位からの出土ということであり、層位的な成果を尊重したい。
- 12) 研究会の折、太川裕晴氏に現物を見せてもらった。確かに補修孔ではない穿孔が施されている。石材は玉髓とされているが、軟玉質に思えた。
- 13) 報告では8点となっているが、あと2点はともに滑石製で、1点は管玉状のもの、もう1点は復元径3.8cmになる紡錘車形の垂飾品であった。これには管錐での穿孔が施されている。したがって、この2点は玦状耳飾ではないので数から除外しておく。ただし、玦状耳飾に伴う玉類ということにおいては、その重要性は変わらない。また、明らかな玦状耳飾の未成品は確認していない。
庄貝塚の出土資料は、池水寛治氏から直接拝見させていただき、資料化を行った。その際、親しくご指導を賜り、利用許可をいただいた。
- 14) 当時、坊津町歴史民俗資料館の早水廣雄氏から発見の経緯についてご報告をいただいた。1930年ごろ井戸掘削の際単独に出土したという。発見当時、烏居龍蔵氏も鑑定されており、アイヌ人が着用した「ケット」と呼ぶ耳環と判断されたい。
- 15) 採集者の話によれば、他に数点の破損した玦状耳飾があったらしい。しかし、完形品だけ採集してきたとのことである。玦状耳飾は1遺跡から複数出土する場合があります、このことが事実であるとすれば、数の上ではもっと多くあったことになる。話を総合すると墓地遺跡の可能性もある。
- 16) これまで2点出土とされてきたが、1点は玦状耳飾ではなく棗玉状の石製品(管玉)である。滑石製で黒色を呈している。したがって、この1点は玦状耳飾から除外する。ただし、共伴資料の玉類としては重要である。
- 17) 文献(水ノ江1992)に早期の玦状耳飾とされたものである。これについては(新東1993)と(上田1997)から誤りであることが指摘されている。筆者も実見・実測を行った。茶褐色の粘板岩製で早期の垂玉の一種であると判断される。
- 18) 文献(上田1998)の註⑤に中期出土の新延貝塚や後期出土の石原貝塚には轟B式土器も出土しており、時期判定は慎重にしなければならないと警鐘を鳴らしている。たとえ後の時代に再利用されたとしても初作の時期が重要である。

〔引用・参考文献〕

- 秋成雅博・富田卓見 2004『上猪ノ原遺跡3・下猪ノ原遺跡』清武町埋蔵文化財調査報告書第14集：
p.19
- 麻生優 1973『下本山岩陰』佐世保市教育委員会：p.22
- 池田朋生 2001『石の本遺跡群Ⅲ』熊本県文化財調査報告書第194集 熊本県教育委員会：p.103
p.161
- 池畑耕一・長野真一 1978『西之蘭遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告（8）：p.35 p.55 p.83
- 池畑耕一 1994「珧状耳飾」『埋文だより』第6号 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 池畑耕一 2008「薩摩川内市黒武者遺跡採集の珧状耳飾り」『南九州縄文通信』No.19 南九州縄文研究会
- 池水寛治・長野真一他 1979『莊貝塚』出水市文化財調査報告書1：p.91
- 岩尾松美・酒匂義明 1964「速見郡山香町大字広瀬川原田洞穴の調査」『大分県地方史』第34号 大分
県地方史研究会
- 上田耕 1981「九州の珧状耳飾について」『鹿児島考古』第15号 鹿児島県考古学会
- 上田耕 1994「耳飾りの流行」『南日本文化』第27号 鹿児島短期大学付属南日本文化研究会
- 上田耕・桑畑光博 1997「宮崎県の珧状耳飾」『南九州縄文通信』No.11 南九州縄文研究会
- 上田耕 1998「九州発見の珧状耳飾」『東亜玉器』Vol.2 鄧聰編 中国考古芸術研究センター
- 上山 耕・雨宮瑞生 2003『前原遺跡群－南一の谷地区・前原地区・堂山迫地区－』知覧町埋蔵文化
財発掘調査報告書第11集
- 上田耕・廣田晶子 2004「南九州の初源期の珧状耳飾」『環日本海の玉文化の始源と展開』日本海学推
進機構委託研究事業
- 上東克彦・福永裕暁 2000『椿ノ原遺跡 第3分冊』加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書（20）：
pp.24-25 p.33
- 梅原末治 1922「伯耆逢坂村の遺跡」『鳥取縣下に於ける有史以前の遺跡』鳥取縣史蹟勝地調査報告
第1冊：pp.40-42 pp.76-79
- 梅原末治 1971「史前の珧状耳飾に就いての所見」『日本古玉器雑覧』：pp.306-332
- 江本直 1988『曾畑』熊本県文化財調査報告第100集：pp.163-165
- 岡崎敬・小山富士雄他 1971『沖ノ島Ⅱ』宗像大社津津宮祭祀遺跡昭和45年度概報 宗像大社復興期成
会：pp.17-21
- 岡崎敬他 1979『宗像 沖ノ島』宗像大社復興期成会：pp.45-50
- 乙益重隆 1980「原始」『多良木町史』多良木町史編纂会：p.44
- 小畑弘己 1981「矢部町名連川の縄文時代遺物」『赤れんが』創刊号 赤れんが出版会
- 鏡山猛他 1958『沖ノ島』宗像神社復興期成会：pp.34-35
- 賀川光夫 1971「石器時代の海上交通」『海洋科学』23
- 賀川光夫 1973『野鹿洞穴の研究－大分県直入郡荻町－』別府大学考古学研究室報告3：pp.7-8
- 賀川光夫 1980「縄文時代の埋葬と粉洞穴」『別府大学付属博物館だより』：pp.6-8
- 賀川光夫・橘昌信 1982「大分県粉洞穴の発掘調査」『別府大学付属博物館だより』：pp.2-4
- 賀川光夫 1998「大分県川原田岩陰の再検討」『おおいた考古』第9・10集：pp.39-40
- 金関丈夫 1957「福岡県法華原遺跡」『日本考古学年報5（昭和27年度）』：pp.63-64

- 亀田学 2001『梅ノ木遺跡Ⅱ』熊本県文化財調査報告書 第199集
- 河野治雄 1972「鹿児島県川辺郡笠沙町草垣島出土の遺物について」『鹿児島考古』第6号
- 河口貞徳他 1964『鹿児島県遺跡地名表』鹿児島県文化財調査報告書 第11集：p.6
- 河口貞徳 1972「鹿児島県草垣上ノ島の遺跡」『考古学ジャーナル』No.66 ニューサイエンス社
- 川道 博 1998『宮下貝塚』富江町文化財調査報告書 第1集 富江町教育委員会：p.42
- 木崎康弘他 1997『堂園遺跡・中尾遺跡・別府遺跡』熊本県文化財調査報告書 第159集
- 木下修 1978『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書』第7集福岡県教育委員会：pp.33-35
- 木村幾多郎 1980『新延貝塚』鞍手町埋蔵文化財調査会：pp.92-94
- 栗田勝弘・後藤一重・綿貫俊一 1980『上野遺跡』豊後高田市文化財調査報告書 第1集：p.36
- 九州縄文研究会 2005『九州の縄文時代装身具』九州縄文研究会
- 九州歴史資料館 1982『田中幸夫寄贈品目録』九州歴史資料館
- 小池史哲 1980『二丈・浜玉道路関係埋蔵文化財調査報告』福岡県教育委員会：p.114
- 国分直一 1976「先史時代の九州と大陸・南方文化」『環シナ海民族文化考』慶友社
- 坂本嘉弘 1990『直入地区遺跡群発掘調査概報』Ⅲ 直入町教育委員会
- 佐脇義敏 1998『かわじ池遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(8) 大分県教育委員会：p.116 p.137
- 鯨島安豊 1978『赤木・下剝峯・大四郎・内和遺跡』西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書：pp.11-17
- 七田忠志 1934a「佐賀県戦場ヶ谷出土弥生式有紋に就いて」『史前学雑誌』第6巻2号
- 七田忠志 1934b「其の後の佐賀県戦場ヶ谷遺跡と吉野ヶ里遺跡に就いて」『史前学雑誌』第6巻4号
- 柴尾俊介 1979「貝製品及び貝類」『高又遺跡』研究室活動報告3 熊本大学法文学部考古学研究室：pp.12-13
- 島津義昭 1978「大牟田古墳群」『福岡平野の歴史』福岡市立歴史資料館
- 島津義昭 1983「ヒスイ出土遺跡-九州地方-」『考古遺跡遺物地名表』日本歴史地図〈原始・古代編〉別巻：pp.335-336
- 清水宗昭・坂本嘉弘他 1979『石原貝塚・西和田貝塚』宇佐市教育委員会・大分県教育委員会：p.23
- 下村悟史(智) 1980「轟貝塚出土の玦状耳飾について」『とどろき』第6号 宇土高校社会部OB会
- 下村悟史(智) 1982「九州発見の玦状耳飾について」『肥後考古』第2号 肥後考古学会
- 下村智 2009「第3編歴史編 縄文時代」『竹田市誌』第1巻 竹田市誌編集委員会：pp.272-274
- 新東晃一 1993「縄文時代の二つの耳飾り」『南九州縄文通信』No.7 南九州縄文研究会
- 新東晃一 2006「九州の縄文時代の二つの耳飾り」『縄文の森から』第4号 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 新東晃一 2008「アカホヤ火山灰以前の玦状耳飾について」『岡山理科大学埋蔵文化財研究論集』岡山理科大学埋蔵文化財研究会
- 杉原敦史・松尾秀昭 2008『門前遺跡Ⅱ』長崎県佐世保文化財調査事務所調査報告書 第4集：pp.207-208
- 杉村幸一 1988「百花台遺跡採集の石器資料について」『古文化談叢』第19集
- 鈴木重治 1987「変革期の装身具にみる地域性」『考古学と地域文化』同志社大学考古学シリーズⅢ
- 瀬戸口望 1984『柳井谷遺跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(6)
- 瀬戸口望他 1988『打馬平原遺跡』鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(8)

- 高田素次 1968『湯前町史』湯前町役場：p.5
- 立神次郎・中村耕治 1978『大隈地区埋蔵文化財分布調査概報』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書
(9)
- 田中一義 1965『菊池川上流の遺跡』『菊池の文化財』：pp.2-3
- 塚原 博 2001「五島列島出土の石製装身具と異形の磨製石製品」『西海考古』第4号 西海考古同人会
- 塚原 博 2003「附編2 野首遺跡及び五島列島出土の石製装身具と異形の磨製石製品」『野首遺跡－野崎多目的ダム建設に伴う発掘調査－』小値町文化財調査報告書 第17集
- 辻田直人・竹中哲郎 2003「長崎県国見町における縄文時代草創期遺跡の調査」『西海考古』5号 西海考古同人会
- 出口浩・池畑耕一 1977「上焼田遺跡」『指辺・横峯・中之峯・上焼田遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告(5)：p.67
- 寺師見国 1943『鹿児島県下の縄文式土器分類及び出土遺跡表』
- 寺師見国 1978「南九州の縄文式土器」『大口市郷土誌資料』大口市郷土誌編さん委員会
- 徳富久則 1986「中小路増富遺跡」『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財報告書4』佐賀県文化財調査報告書 第83集：pp.75-76
- 戸崎勝洋・青崎和憲他 1978『阿多貝塚』金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
- 富田絃一 1998「第2章第3節 貝塚の始まり 前期」『新熊本市史』通史編 第一卷
- 富永直樹 1985「下見遺跡の調査(2)」『東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書』久留米市埋蔵文化財調査報告書 第43集：pp.105-106
- 中間研志 1999『貝元遺跡Ⅱ』福岡県教育委員会
- 中村修身 1982「縄文時代大珠について」『地域相研究』第11号 地域相研究会
- 中村耕治・八木澤一郎他 2001『上野原遺跡(第10地点)』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(28) 第8分冊：p.185 第10分冊：p.94
- 濱田耕作他 1920『備中津雲貝塚発掘報告等』京都帝国大学文学部考古学研究報告 第5冊：p.88
- 林潤也 2005「第1章旧石器・縄文時代」『大野城市史通史編1』大野城市史編集委員会
- 原田昭・他 2007「岡遺跡」『一般国道57号中九州横断道路建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査書』(2)
- 東真一 2000『内小野遺跡』えびの市埋蔵文化財調査報告書 第24集：p.266 p.351
- 樋口清之 1933「玦状耳飾考」『考古学雑誌』第23巻1号
- 廣田晶子 2003『永迫第2遺跡』高岡町埋蔵文化財調査報告書 第25集：p.32 p.42 pp.74-76
- 福田一志 1997『伊木力遺跡Ⅱ』長崎県文化財調査報告書 第134集 長崎県教育委員会：p.50
- 藤崎光洋・中村和美 2006『三角山遺跡群(3)(三角山Ⅰ遺跡)』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(96)：pp.72-75
- 藤田富士夫 2003「環状型玦状耳飾に関する基礎的考察」『新世紀の考古学』別冊 大塚初重先生喜寿記念論文集
- 藤本貴仁 2008『森貝塚』宇土市埋蔵文化財調査報告書 第30集：pp.100-101
- 太川裕晴 2007『仲野原遺跡』日向市文化財調査報告書：p.47 p.56 p.130
- 古城史雄 1996『沖松遺跡』熊本県文化財調査報告書154集 熊本県教育委員会：p.129 p.140 p.268

- 本天道輝・兩宮瑞生 1989「玦状耳飾の新例」『鹿大史学』第37号 鹿大史学会
前川威洋 1969「九州縄文後期の装身具について」『九州考古学』36・37 九州考古学会
町田利幸 1996『黒丸遺跡Ⅰ』長崎県文化財調査報告書 第127集 長崎県教育委員会：pp.67-69
松尾禎作 1935『東肥前の先史遺跡』：pp.37-43
水ノ江和同 1992「九州の玦状耳飾」『考古学与生活文化』同志社大学考古学シリーズV
水ノ江和同 1996『中村石丸遺跡』一般国道10号椎田道路関係埋蔵文化財調査報告 第8集 福岡県教育委員会：p.117
水ノ江和同・林潤也 1999「浮羽郡吉井町所在法華原遺跡について」『福岡考古』第18号
元田順子・牛ノ濱修他 2003『市ノ原遺跡（第1地点）』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（49）：p.63 p.67
森田浩史 1998「宮崎県田野町で採集された玦状耳飾」『鹿児島考古』第32号
山崎純男 1987「遺跡の位置と歴史的環境」『柏原遺跡群Ⅳ』福岡市教育委員会
山下実 1996「長崎県波佐見町根比呂池採集の玦状耳飾」『地域相研究』第24号 地域相研究会
山下実 1997「久留米市北宇上池採集の玦状耳飾」『地域相研究』第25号 地域相研究会
渡邊隆行 2004『大肥占竹遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書 第48集：pp.131-132
和田理啓・久木田浩子 1998『荒迫遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第11集：p.173

【図・写真の出典】

- 図2-1（鏡山他1958）2（岡崎・小田他1971）4（木村1980）5 島津義昭 6（小池1980）7 富永直樹 9（富永1985）10（水ノ江1996）12 島津義昭 13（中村1982）14（林2005）15（中間1999）図3-1（徳富1986）2（七田1934a）図4-1（辻田・竹中2003）2（福田1997）3（山下1996）4（町田1996）5（杉村1988）13（川道1998）14（麻生1973）15・16（杉原・松尾2008）図5-2~4（樋口1933）図6-8（清水・坂本他1979）9（坂本1990）10（原田他2007）11（栗田・後藤・綿貫1980）12（渡邊2004）13~15（佐脇1998）図7-1（秋成・富田2004）2（和田・久木田1998）3（廣田2003）4（森田1998）5（太川2008）6・7（東2000）8（上田・桑畑1997）図8-1（瀬戸1984）2（上田1981）3（上田・雨宮2003）12（中村・八木澤他2001）13（本田・雨宮1989）14（池畑2008）15（上東・福永2000）16（藤崎・中村2006）図9-19（本田・雨宮1989）24（池畑1994）25（元田・牛ノ濱他2003）26（本田・雨宮1989）他は下村実測図
写真1-8（中間1999）14（木村1980）写真2-26・29（富田1998）30（中村・八木澤2001）
他は下村写真

*出土一覧表については紙数の関係で割愛した。別途提示したいと考えている。

*脱稿後、池畑耕一「終焉期の玦状耳飾り—鹿児島県の例—」南九州縄文通信 No. 20

『南の縄文・地域文化論考』新東見・代表記念論文集 上巻 2009. 9に接し、新しい資料を知ることができた。実測・実見後、検討を加えたいと考えている。